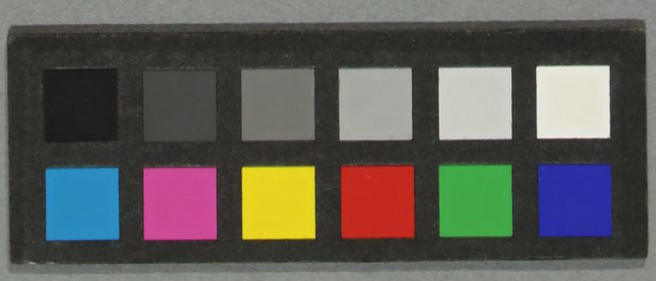
く5
4429
3



門 へ 5
覧 4429
巻 3

昭和九年
九月元日
贈呈

培堂

俳諧發句歳時總目録

秋之上

久月初 三秋二
初秋 五 七夕六
暮秋 星光

烏鵲橋十 預朱
立琴 七夕鞨
蓼売 菜市
追火 魂待
盆 于蘭盆十三
瓜馬 芙蓉

秋吧 来秋
星逢八
天河九
芋茎雲
逢筆入十
逢陸
魂棚十二
蓑虫
麻木著十

生姜 十六
旅餓鬼
地黄衆
柳散 十九
桔梗
女郎花 廿六
蘭 廿三
木子草
萓草
蓑衣草

切藥
益母 十七
犬久字犬 ワトイリ 衛家入
撫菱
蕣 廿一 アサマヘシ 茶花 廿八
蕨 廿九
芭蕉
甫 廿四 スマヒ 能草
曼珠沙花
蒼蒼花

擣待 十五
蓬 艾 十八
舟形犬
一葉
鼠尾草
草花 廿五
萩 廿二 ツクル 旋覆花
茉莉草
子日草
歌

躑躅

絲瓜 廿六
蓬実花
秋葵 三十八
虫送 卅
夢虫
蜘蛛 コホロキ 四十五
虫籠 卅六
蓼虫
地吹
小鷹
扇置

西瓜
秋牧
秋海
虫供 卅一
ヘタオリ 叢斯
寓虫 イトゴ
蜻蛉
猫虫
狗鷹
荒鷹
投網扇

蕃椒
秋蔦 廿七
蜩
松虫 卅三
蟋蟀 卅三
蓑虫 イトゴ
虫籠
猫虫
狂制吟
鷹心別 卅七
残暑
霧 五十三

木瓜実
秋葉
精玲 三十九
鈴虫
栗立虫 卅四
虫売
藻虫
鶉
鷹寸 卅八

稻妻 五十四　　狗尾草 五十六
相撲 六十一　　花火 六十二
秋くれ中
八月 六三　　菜月
田面 六十四　　八朔祭
吳服売　　秋月
名月 六十五　　待宵
今の月 七十　　新月 七十二
閏名月雨 七十四　　雨月
雪見 七十六　　雪の月
秋月 七十七

稻花 八十四　　稻　　狗子花 五十七
稻刈　　蕎麦 八十五　　秋風 五十七
稻莚　　書莚　　八朔祭
新米　　田守　　二百十日
芙蓉　　檀特花　　待宵雨 六十六
鶏頭花　　雁来紅　　名月 六十七
白粉花 八十八　　秋海棠　　名月雨 七十三
萩花　　萩頓 八十五　　既望雨
花薄 九十二　　尾花 九十三　　立待月
葛花 九十四　　霧等　　臥待月
撫子花　　牛房花　　月代 八十二
早稻　　饒稻
毛見　　稻舟
稻垣　　焼米
秋の雨 八十六　　木犀花
紫苑　　風仙花 八十七
鬼灯　　蔓草
稻上戸　　稻虫実
花虫　　薄 八十九
芒穂　　雀麦
野菊　　若烟草 九十一
水引花　　等

菊
秋茶子
同引葉
黍
新蕎麦
豹沙
夜生会
搗衣百一
引板
坐ル(ウツサム)百六
夜寒ル百七
烏瓜
芋
苓子蓉
蜀黍 九十七
葉蝨
老分 九十八
豹摩百
葉ム子百三
漆多
肌寒ル
霧寒ル百八
葡萄 九十六
雫(メカコ)簾子
栗
蕎麦花
蕎根堀
二百十日 九十九
豹追
鳴子畠
驚鳥
潮干
秋寒ル
冬
長夜 百十
鴫 百十二
豹雁
冬籠 百十七
小雀
類月
啄木籠
歟(シラ)鵐
荷紙
分入
秋寒ル夏里
燕鴈 百十三
雁 百十四
採籠
ム雀
類赤
鵙
沙魚釣
鵐
蒲簟
秋日 百九
秋物
鶫
狩座籠
菱喰 百十六
鵙(ヒヨトリ)
四十雀
鶺鴒
狩子敷ク 百十九
石鮒
小鯔曳 百二十
蛇入穴
秋物
鶫
狩雀
小籠浪
隈隠籠
鵙 百十八
菊戴
古刀魚
豹鮒
淡紙
簾 百廿一

麻苗 百廿四

秋之个

九月 百廿五　長月
栗花匂　後雁
菜花錦 百廿五　十日菊
菅花衣 百廿五　櫨紅葉
白膠木紅葉　楢紅葉
猶紅葉　菜花
浪速 百廿六　菜畑
后月 百廿八　十三夜 百廿九
室月夜　雨迎え
菊酒 百廿六
菜 百廿七　紅葉 百廿三
櫨紅葉　楢紅葉
柞紅葉　木実久松
朱市 百廿七　月名残
牛蒡 百四十一

九月晦　朔酒
濁酒　末綿
團栗　柞
淡柿　九年母
柚　柘榴 百四十
梨子
菩提子
木実
山梨
菜花
楓蘗 百四十五
牡丹根分　蕪菁
万年青　吾亦紅
菜生姜　芦花
芦穂 百四十六　鶉豆

松露　松茸　羊肚菜（イクヂ）
初茸　雲龍（カリ）　榎茸
毒茸　菌狩　初鴨
崔成輪　尾越鴨　墓七
冗惑　綱代守　初雪
秋雨　秋雨　百五十三　雪催
秋雲　秋風　百五十四　秋田　百五十五
秋浦　秋川　待冬　百五十七
秋名殘　秋扇　百五十六　秋蠶　百五十八
冬近
秋同源純

秋　九　ふくれやいつ尺ちゝの空　蕪三
　　家ちかき石河すゝきみだれ咲　保吉
　　又月や森わたる夜の雨ふり　冥々
　　又月や先ある人の門ばかり　道彦
　　又月や人の中行く夫の袖　爽秋
　　又月や屋ふたつをむいてゐる　天来
立　秋　二三尺立掛尺たり蕎麦の花　芭村
　　てる日や氷沢地たつぷりと秋ぞ

今年秋

なきがらは都立ちしまゝ小塚のその通ひ路
都たつそいそげ小塚のその通ひ路　　紀伊　梅調
うつそみはおもかげとなりぬ秋の立　　陸奥　松鳴
あつまりて人の葬送る一服立て見えし通ひ路の柳哉　　出羽　柳居
なきがらの都に送る秋の風　　同　芭村
葬の済みて人散る秋の風　　同　鳥酔
なきがらの都に送る秋の風　　同　晩壺
なきがらの都に送る秋の風　　同　几董
なきがらの都に送る秋の風　　江戸　存義

その春の仏たより都立や氷を拭ふ棺の末
立棺のすゝしく軽も野すそ
都立てうるく拭ふ額うれ　　亜流
余寒きるや都立棺の元　　魯郎
秋立やたゝさゝれたる新の松　　志宇
秋立や朱雀の頭の跡ふし　　紀伊　洋左
立棺のそよ〳〵と花へ芒着　　雛啄
うれ入る四方文花より都たち　　陸奥　可全
ひぐれや莞蒻の楽も棺の立　　阿量
をとゝしもたゝ立て秋立て　　出羽　有鏑

古事ゆ葦原咲てけその秋
字を末々けを秋ととと人のい
秋八来ね考むす葛と葬に
葬の飯き初ゆりけその物、
ろハ考にむすれ一等ゝその秋
故の長も大事にたその物
てり花八仏りたなすゝその名き
その姫良も洗字分りり
亀多庄再のそ故石ふ人和八葛咲けその秋
服をたれ乙ろも高しけその物

書叢
自挽
凍紙
梅人
伐吉
大江丸
新荘
橘庵
朱矣
五勢堂
屠蘇

おりふしもるてすしや
嚔しそ晴ゆろ多ゆりけその秋
阿ゆりと市れそやゝその物
紙つゆおりのもすするやゝその秋
おろくや是のえゆりそその物
時しやとおりれしたりそその秋
阿ゆるゝ人の来れゆりそその物
時しゝを誰ゆもいゝれそその秋
葛ゆりと号る人れそんそその物
相柳ろ生もゆ人れそしけその秋
藥缶のしらろへぬそその物

道茂
蒼生
蓑虫
号老
羅風
三津人
亜流
快書
何丸
白考
女志宇

来秋

寿し良のひとりも見こんその娘　陸奥　学誠
こゝ娘と出て見こんれこゝろ　賀　岡竹
掃てゐる木のもとさへもそこそこの秋　女　挹翠
灯のともる娘のまゐりこゝろ　陸石
初のたれ秋ハ来にけり汁の味　南尺
来る娘の葉もさゝ歌と持れこゝろ　楼雪
来る娘に云ゝとり遠き初ざかな　刀屋
来る娘やもゝ色遠きつゝみ　蚕机
そこ娘の来るのさゝ初ざかな　堀前
盆ぎのこゝろ秋の来たる気　柑翠
汁の月もすゝと通りて来秋元　秋長

初秋

初娘や聴さけりと青
初秋や庁笠ふし文
初娘やよそのかたの来たるん
いそうと秋れ来たるこゝろ
初秋のそもくいきくれ
初秋のこゝろいきくれ
月のさゝ、その娘の印
初秋の川脈れたる小笹
初秋の麻れたる道
こゝろ出る方を初秋のうつり
初秋の老母そ初秋のうつりを

寛壽　白雄　孟夫　保吉　賢吉　公　天明　士朝　公　公　恒丸

七

ゝメや大ぶれ家の庭の松　寿言
ゝメやちる花てあるうしろ　芳之
ゝメの笑顔一つや緑うつ　完来
ゝメや笑ふ咲ゝ花も咲ゝて　三顧
ゝメに関のひろふ名江かな　乙二
新妻の父母ましてのあと　当志
ゝメや汗ぬてのる井の月　鶯笠
ゝメやちる後八人の上　亜渓
ゝメの雪ふる庭ふれ　布摩
ゝメやゆとうふれとあの松　北松
ありくとゝメ見てそ先ふれ　久臧

安藝　猫哥
摂州　撫子
筑紫　風
保吉
大江丸
妻路
土仙
公
狂丸

星ふるつゆも今や秋なるらん
星合や空よりふかき人恋のなみだすゝ
星今年新しくまれ人の老
星今や七夕明年勢
星今や七夕明年勢
人〳〵七月七日
日今やしいよ〳〵遠し
秋の空星ハ四つ八つ遠し
故郷をとん星を名の国とそ
尺しまやさもきつの糸竿
ものおの星もろこれてまたろう
星まつや魂もすゝしい波つき

星の恋いさよ月やのぼり
ぶらりさの色に出ぬや星一夜
ふまをそ七夕星人星の衣
花の色を空にちらして星今
二ツ星白の深れる
鶏の巣もうれや星の乳
牛投て花火を二ツ星
星の夜やさゝやかな船
星迄我も屋形流さん星なれも
星迄〳〵夢ぞしん笹実そして星迄

長命
舞鶴
志賀
平尚
幽晴
其日庵
桃園
湖白
晩臺
桐庄
一葉

天川

星秋　陸奥　朴翁
星光　打ちの有るうら　菅江
星の　ものうらうらと星の光　孤心
　　曉赤
　　陸奥　掬ぼ
星の　ものうちの光うちの星の　騎之
世をたのむ人もそうそうの星の　松江
そよろうろもろうの星のかわ
松原へ秀巡まや天の河　江戸　つ悪
秋すし松たうし天の河　美右
住そその半それうの紙河　左助
まうれ別しうの雨そのの河　白梅

そのの星より上れ見ゆる　会
秋の夜を押出したりてのの河　岱書
おてすそ夜のの雨なのやてのの河　保吉
そのの見そ住産頃もるこれうう　陵石
秋そしてなの光うてのの河　抱光
そのの河光越すぼれ見ゆる　士的
そうあれて馬もりそのの　会
海人れ酒ふそのの河　希言
さむしろ衣ぼそのの河　耕先
のつと歩るりれそうそやてのの　会
流今一年のの雨のやてのの河　士星布

梳　美梳の美を詠ぜる後集の梨か

梳の美にて定まりぬる事不文ま

梳の美や三粒降ても星の雪

ふくよかにして七夕梳を出されたり　道亮

梳の美やまのうらめく秋の事　武秀

羊雲霧吹よせて月にうろいもの雲　西羊

立琴　立琴やたゞ低の教そなん　麦宇

たてこめて垂こめてまつ星をる　ハ木奴

七夕鞠　七夕鞠やもめたり後　几董

ながうる鞠や月ハ雫の雲ゝ　可傑

池坊立花　坊ろ花も有うんさし枝お　陸奥一子

逆掌入　掌入や笑ふうしろの菊左

掌売麦　麦売ハ南てふ事売うり　几董

草市　世の中の人のうたてく草市　去来

刺結　草市や人のうたてく刺の数　完来

医陸　さしさゞの仏をうたうる医陸　李の園

医史　医史やたゞ医うる秋や雲ふ白の医史をまつ　文鳥

医史ハつゝまの老うれ　政二

梨澁　硯布　屋烏　完来　李の園　文鳥　政二　一茶　自雄　公会　保吉

匿火れそうしさの九月末ゟ
匿火や素嬉琴ゟ家ゟの文ゟ
匿火ゟそれをれのはつれゟ
まくと約火のごとくそれ夢
匿火もこるまのうしや浦の百
これようり灵ゟつれ等
魂約や抱さるもの方れ
魂匿嬉匿約約ゟるる人や
嬉匿ゟれ匿法へぞまそうし
嬉柳や白髪を持ゟ猪の上
ゟうおれや故状の祇ゟ魂ゟ

存亜
道亮
一茶
諦ㇾ
義多
白梅
仝
仝
菅三
勾破
蕪村

嬉柳を尾ゟ
月ゟれハ人の良心嬉ゟ
嬉柳ゟそのゟの文の横ゟれ
嬉ゟ美家の性そゟれる
嬉柳や灯ゟをれ
嬉柳や灯ゟれ
嬉柳の軟ゟ
ゟう灯もゟ
嬉柳やゟう

仝
蕪古
暁表
白梅
涼風
保吉
几董
仏仏
又助
大江丸
柳荘

亮桃や達ふ小ふり
亮桃う見打ひしう人羊 畑
打しうへて実しうり亮 条
面目ありてうけぬ亮条 作法 頃字
すちうれ晴沼まて亮条 定雅
桃栗のうちはまし亮条 雪娥
玉桃や土坐して明ぬうす 一茶
亮の吐た夢のハ事をのんり 学笠
聖灵の森泣玲を宵九月 文路
花終れ学うちうれうまる条 女 演藻
河土うのや打ふうてもる 暁英

于蘭圭

桃 死 桃 師のあや

亮んよ
分れ雲よ歳
さくまもそ
人別て花ハ
りうめぬ
亮の虻も見
満床まみや
夢ふんりと
うち亮や柳
うふんやう

今
白娥
道充

張る 樽支
安乃 字的
山口 仙李
寡と
後面
学笠

墓参

青月の花篭る参や墓参　完来

大和を去り此てかり墓参　菅之

手をとる乳母よや墓参　護物

成業又は道さかりて墓参　寺迪

これや子の息所ふても墓参　長老

人の親の分ちてふかりても墓参　不白尼

いつまでも松ハまだしや墓参　二瑳

まるまるりの見しが国を見てゆく　河内　井圃

瓜馬

身聊も世の道具もかり瓜の馬　竟松

生身魂

孫売やまことの事も生身魂　護物

蓮飯

渋魚の嗅ひされかり蓮の飯　月塘

麻木箸

花世や麻木の箸しのままつもしろ　也呈

われてかけしかや風の夜麻木箸　保吉

切籠

はらくと見えるや切籠　暁甚

切籠やまきを残したる風の跡　魔去

うす紙の切籠にてまず一本　月塘

切籠に樹の名見えるる夜かか　保吉

老鷲本にかけても寂し切籠　就昌

切籠の光かかし板かか　士鈞

万家のふちね枕そこ切籠　一瓏

一夜さてかれもまよや切籠　米兄

大かたは名のりかかりてる切籠　青裘

初秋

うまれ人の死にたり松竹窓
はりくと竹筆のあけて松の白
竹筆の松下れるもてやれり
雪のあるも曙も実のこころあり
竹筆うし松の消しきえめ
乱ともろもろ声して消えたり
盆ともろもろくのみ後の気
る竹筆周り考てだこれり
嫁多おれ法師たるぶりてお
吟れてを天はこのおりこお

著二
蓑ヲ
白塊
久眠
其笈
三の
棟老
周鳴
子渓
文麓
巻ま
会
司徳

初秋

白骨みおりてとろろやの
初秋にぶるうてれて面へり
初秋の葉にこそ
初秋や鶏巻て死う角力元
せうたいの松まの初秋
つくの周ろうろをとり
おりん初そ物れ出たる蝶お
まそうまた蝶をして逃どう
ふりうた蝶お
牧九人ころ蝶お
落れまそれあてをりお

完来
蓋お
几董
天明
遅鳥
句碑
晩来
会
会
蕪右
蓋お

白桃
会
感吉
更衆
仏化
大に九
会
梅人
結句
玄蝶
梅廬

発哭
年仏
去命
月化
命源
電撓
霊人
万如
去月
小地人
久蔵

生月亮

[illegible]

九朴　松江　李尺　古梁　義門白樓　石凡　露月　古節　曉雲　白樓　美業　文古

盃　九月

[illegible]

姑射　曉雲　白樓　大江凡　洪道　士鈞　雲龍里　合　雪朱　一学　岳舘

送火

その日余りて気うり
くくもれ灯火ともして
人の集てはゝくつやその日
又十日迄兄弟うそのの日
吏婦その又も迎るとそのの日
数を数す冥ハおりて手そのの日
そのの日灯ともしてうり実にてうり
まず実にて光りてそのの日
盛下話のうりころりやうの日
送火や霊の迎火消残る
そ火や墓のふそ見ゆる月

平角
蓑字
寛松
葛子人
東芽
冥也
純角
陸奥女
蔵
虎道
月雄
菅三

盂　己

施無畏
実やれハこう迎火やうき
精霊のそされるうきお
大文字火
走の跡の香集記すや大文字
妙法火
大文字や一筆とうを深仕しめ
妙法の火うう実にハさて
妙法の火ともやしうう参うう

江戸宇摂
施仏
其来
大和女
城勢
護物
蓼お
深美
一瓢
来院

永秋火　永秋火の消ゆるや雪の湖　不知作者
地爐集　化粧して地爐を出でぬ末の世　午寒玉
衛宮入　つと入や吉人化粧とそれぐ　蕉翁
蓑又入　頓入て至一化粧とそれぐ　几董
一茶　吉花に蚤虱のわく手数入れ　春丁
　　蝶のまず中ぐ一茶おり　蕉布
　　詮のぐく相の一茶おり　白雄
　　ぐる肌に気の相の一茶おり　今
　　相一茶狗を仁ぐ為ぐり　蕉布
　　狀もや相の茶ぐ人のつ　保吉
　　兄ぐやる一茶ぐの春の秋　斗入

狗殺

等の戸へ指れ入ぐり相一茶　士朝
又等を押ぐる一茶おり　玉箒
落ては見ぐぐく相一茶　午仁
ぐ兄ぐといふ茶ぐれ一茶おり　一歌
留ぐの戸代字の出変ぐり一茶おり　長高
夜ぐぐん坊良の一茶おり　枝長
等の地代り卵やおり一茶　一慧
相の来やぐぐりをぐん　作九
分ぐ兄ありぐぐ一茶おり　周曲安園
ぐぐよき相ぐりぐる茶の狗　周文
相ぐるやすぐぐ又のりのぐり　蕉布

萩

歌

いそしや萩うつろふ事の
けさあるも思ふ手ごろ折
萩事この一節の心つゝ
この妻のそこし奉愛まり
嵐も著茅ふし奉ちる
萩事も雅ふの分ふう
ちる事物の自ふの堂ふ
勢語の所も奉ちる萩
毎日の地ふ奉ちる事
妙立の良ふもう手ちる萩

発句

嵐尾子

萩折ふちる不立腐桶
みそぎやらうふる雫も
ふそふの立の折ふなる
みそぎやれふなる萩花のさゝもつい言
ふそばつふ八月の次
みそぎやふ不罰て坊ふる
みそぎやふ不罰八月の跡手坊
面ふもふ萩花の巻ふ
萩投ふふと云ふ萩投ふふ
萩投ふふといつれも花のいふふ

一葉 萩折ふちる不立腐桶
曉雪 みそぎやらうふる雫も
伊勢 杜艸 みそぎやれふなる萩花のさゝもつい言
麦千 萩折ふちる不立腐桶
且々 萩折ふちる不立腐桶
一葉 萩折ふちる不立腐桶
曉雪 みそぎやらうふる雫も
可九 みそぎやれふなる萩花のさゝもつい言
女子代 萩折ふちる不立腐桶
伊賀 萩折ふちる不立腐桶
曉雪 みそぎやらうふる雫も

葦

十しさ木枯の
花枯枝名のこの
おりくしてさく
ふさ〳〵枯枝の
花枯枝ありて
枯枝さゝる
白枯枝雖
勅良やさ
葦や人も
勅良や雖
勅良やさ

葦古
櫂元
一葉
女演藻
白梅手
里雙
池朱
南山
也子
飛ぶ
紅桟
女子代
与疎

勅良やさ
勅良の
勅良に
葦や秋
勅良や
芭蕉
葦や
勅八手
勅良や
葦や

撰の
花ち
ふさ
椿の
をつ
ふさ
葦の
二輪
葦の
実を
葦の
花も
ふさ
葦の

葦古
百枝
櫂元
葦古
晩蚕
合
白梅
合
几董
秋風
除石

敦良れ　寒すらむ
あさぼらけ　ゆきの白にぞ
咲にける　敦良の花ハ散にけり
敦良の　年にも失をうゆかぬ
哉くと　葬の
いく年の世を　敦良松の枝
葬のしもを　白にうれしく
葬をとり　虐げる小笹も
雲半　花のえもそたし花の上
氣葬の　敦良ハ敦もまるも
敦良や　敦ハいつれ的撫ん

保吉
自樂
又助
垣九
士朝
公
玉笹
桂只
樓雀
公
菜兆

敦良のそへぬ雪にぞ
あさぼらけの　ゆきの秋を咲へられ
敦良れ　伝法の
葬や　ひろく　の花　雀
敦良のうつくしく　人も来ず
葬のえや　白の洗れ笹
敦良の花の上も　笹
敦良や　ろ八月十五夜
敦良れ　のりえそあるとも
敦良の立とまる人をねがけ
公のもろく　葬を見て

栄英
公
完来
氣望
公
筍之
一字
乙二
道光
天笑
公

芽の葦をよりて歩る牧わか
牧良やなる風やの愛をいつてきて
葦や撮もらし風やの甘
葦やなる花勢して花の咲
牧風〳〵牧良をを受てう
牧良てもそしきせと来れう
牧良の咲し七酒の美兄ほと
牧良やうりるたる美の上
葦の来れ咲る依気風
牧良のりて名を打〳〵促来
様や花一倍の人の敷

月花
今
素藥
今
長歌
今
一瓢
長高
寛松
橋恵
一葉

牧良の花のあるりれまりか
葦を入たてくる美を被てう
通すまりくうの敷良の花
そのてたまり兄る葦ふうう
牧良やうり咲て秋の花
葦やなるりと咲る人の敷
牧良花てそすりを葦の春
葦やひり流くしのう
牧良やくふ葦の中の花
来る気の葦それ兄ほくう
牧良もなれあてれ兄ほくう
牧良の姫るか

美ふ
鞠風
蕉扇
少将
荒和
芳雁
雪笠
三津人
護物
瀧る
表丁

萩の戸を咲きそめしより
萩の花折れる袖まで幕しみ
萩の花折れる袖まで幕しみ
幕やらいやり捨てる袖まで
様も見ろ見ろ袖よりぬ
萩の戸のぬれぬ袖こそ恨めしき
除秋をうく幕の下かな
萩の戸に見ぬ人おのみの袖
幕の萩誰かたれ見ぬ人の袖
萩の戸に追ふてなるく雲かくれ
萩の戸も見ぬ人ゆえに袖ぬれん

万葉
栄也
卓也
春涙
女志宇
解ら
詠物
梅月
陰奥
不岡
能は
双鳥
双湖

萩の戸や夜ふけぬ内の雨の音
萩の戸の雨に恨て咲ぬらん
梅の花雪ふるも咲ぬ
幕やさくらむ雪の萩
萩の戸の花に出る雨の糸
萩の戸もなけく見ぬ人の袖
幕ふまぬ人こそ咲花
と伝や萩の戸の雨
萩の戸や隣の竹をあてにして
萩の戸ハ我の外をあてにして

尼ケ海
蘭室
北尾
木鶏
菜老
ニ戸右武
ハ
安曇庵
かより
梢鹿
江戸
悦平

木撰

草　花

姫百合　文政人
雪柳　古意
古意　女志々
一丈のうめもどき　姫百合　嚢心
姫百合　江戸曲亭
姫百合　松江
むべ咲や武蔵体むべくり　武蔵　南井
秦つまもりたる一物や萩　但兵
朱ちりたるそうそうてりそふむべ　江戸女流　風
萩　ふくめ　江戸女流　風
萩　芳亜

公
士訓
帝云
広坊
以長
玉翁里
石燕
蓼々
竜松
漫々
一甫

秋の名ハその花
春の鳴りの淋しさよ　不
秋の字列ねとも花の咲
うそふんう花よ秋の字
その花よ秋ても是のうち
ぬ鳥のたそ　その花
その花火のうそ　姫ゆ
その花をたれ沙弥ゆて道つ
うりあつそもの秋の字
大白の泡のりおやその
玉ふのおて生れるりおゆ

女郎花

草花の果ハちゑまもつくらし　由之
草の戸の花にまけるゝ住居かな　九朴
咲いさうな草のちらち草花　冨岑
まくれしらぬ花あり秋の草　老鶴
木のなるやちらされ草も花のさく　卯丈
あるまじき咲すもあらず草花　鬼郷
ほろりと見て摘にけり草の花　下総 菓明
色角して一把に折ぬをみなへし　竜成
くさの上に折ハ淋しをみなへし　菫古
秋風をよふすて野中をみな花　暁壺
岩の中に色河流てをみなし　有雄

人去れす思ハ色ぬをみな花　岱青
野中に成りゆくをみなへし　秋瓜
をみな花をみなの名にもかゝり　蹄石
をみなへし名の寒ぬ影もかゝりけり　斗入
をみな花たまれハ月の淋し　さそ　仝
手折るに秋風なちぬをみなへし　大江丸
うるめしき摘やて序乱るをみなへし　存亜
垣の囲やをみなへし　をみな花　写為
路中に見ハ見れ手をみなへし　士朗
をみな花起るれぬ名にけり　仝
をみな花淋しさまに折り込し　道濃

義堂
一学
道元
公
魯堂
大鼻
白雨
雪舟
松岡
雲坡
梅関

養叔
等益
一葉
饅頭
卓池
業也
文角
拙斎
雪鄙
雲坡
梅関

萩

うまおの萩　可笑
木の花の萩　和名抄
鶉の羽色の萩　未ちこもち男了
毛ぶそ萩　萩の下枝か
うす萩　一茎に赤一茎
うす萩を　まちこもち
のうれあひて一枝うす紫の萩
吹こぼす萩の卯花　志
萩の花一すぢ折さし
垂穂もち　保吉
萩の穂状の古刀にうつり

茶花

ゆふ花　雪の
大白にうつる月ぬ人の松ふく
ゆふ花　鬼の松を抱むか　ゆふ
そそそそかいつれる月ぬ実ふる　下地
折そそる　老ゆふ
ゆふ花むつ　うふ
剛の茶の　ちふや男へ
秋見に吹を　ゆふ男へ
そそそそ　のそくふ　俗名
男了　孤独ゆふ

月ぬ人の松ふく　ゆふ
大白にうつる月ぬ　ゆふ
ゆふ花　鬼の松を抱むか
そそそそかいつれる月ぬ実ふる　下地　椒尾
折そそる　老ゆふ　拂塵
ゆふ花むつ　鬼卵
剛の茶の　瑞ふ
秋見に吹を　ゆふ
そそそそ　藏六
男了　呉茶

吟出されて秋尺の詠り多り
不拂て壺中亜来しより翁の忘
庵の月あれり表八ちより多り
すゝれ方ふりて翁の月
咲ある表より月あり春の忘
翁のふ門をたゝくやうな
月翁や倖しう尺ゆる埠のつゝ
村白やつの〻のうちより翁の花
呪ありてその〻のく翁のメお
心ほや杉もちそも翁の忘
まつ人八来て仕舞う秋忘

合
秋瓜
森亜
斗入
弦匠
乙岡
昭九
士鈎
合
合
柳秋

味しさの志なし八翁れうれう
翁さく〻囲炉素のいぶる風う吹
月翁や待ふりあるうる
技のよき者うく〻翁の忘
爲来て門ともあや翁の忘
秋の翁体をもてふるうう
翁のもちるハちれるれう
雪うち翁の月六う蝶の来る
七郎尺もちるう汲れるよ翁
尺さものうる汲もう〻翁の花
翁のうメ早の案波もあ中心

抜又
菜兆
支岡
乙鈎望
合
完来
樗先
乙二
一学
道麦
合

り人のうたよめる萩の垣根
心の板の唐うも見ゆる萩の色
むつくと折しき萩の見頃と
降のあり萩の見頃と
萩折て
氣うそ
我萩や
萩さうそ

美机
悉能
楼生
美子
冥く
魯頃
手角
少池
康古
一乘
等笠

日うその
折てや
うそ花の
まのうれ
起上る萩に
萩の白
白萩や
枝のつゆ
ちれてそ
萩の
白萩や

雪梅
公
寛松
二月人
公
美也
女志宇
士卯
松屋
梅門
二

雪芳
梅二

萩

萩ふくや出てうつさむ橋のもと　東陽
ゆう方と申尾花の名の外萩夜更　女秀
霧さいやちえさえ萩の元岸　又光
萩折て歩行ふき葬うり　岩城 由翁
白萩に星のうるうるれうる　真雄
片咲をうれめて萩咲　小姓 朱之
白の萩すゝまれ中へ乱ゆうり　心人
こちらへもうをつけ水萩のあ　陸奥 海樂
ほゝくと萩折る人やゝん　丿　其二
う窓や物のりあく人萩のちる　古民
片咲や人に手折の五萩　佐原 団心

萩

根ふく人にをうれつ萩のふ　茅丸
こゝろくわのれも萩のふ　掛鹿
次ゆる駅の小萩も咲ゆう　敦中 岩手平
両道の萩を折てゆうり　仙内 古光
志つゝを萩れをゆるゆしお　伊勢 雨渡
萩のうれようたるなゝか　椎丸
萩の手ゝさえ外ちうたるう　ニノ戸 ちよ
秋萩の風うるれて人を吹　摂良
焼のりおにうゆめ萩の吉　真吉
魚つれ刀さしうり萩の笹　周吏
萩の実やまいちうり柏し香　陳美

蘭

芋の葉も破れて萩の末うら
一閧するはくやとそ萩の葉の
り物のそよぎ消や萩のそよ
萩のそよ人の音やとまりて
ほんふりとめられてみちくる萩の葉
めつしくもあらぬ夜萩の葉
ゐるさびしさ萩の葉のそよ
萩のそよのかたをそよられたり
葉の先を葉もそよぐ萩の葉
原の葉もれてや萩白し
らんのそよ孤の萩を好む

胡枝子
卓池

花海棠
未詳
鴻巣

陸奥
撫子
抱露
石尺
梨雪
古節

江戸
平砂
琴柯
公

秋や海人深れて萩のもと
人をとすもるし萩のそよ
これそも老ゆくそのと萩のそよ
江の秋や芳りもの萩のそよ
野べのもとつゆのたく萩のそよ
延ふつゆ折捜すんて萩のそよ
萩う乗る風方角もうくうく
森てふくやうそ雨のかの萩のそよ
村のれのこまもあるもの紅葉の萩
うくやいつるうそ萩のそよ
萩のそよ集あれだけ八百らし

斗入
昭九
士郎
今

陸奥
北涙
琴雪
何頼

談圃　周竹

書籠　白雄

夢古　武秀　柳几

士訪　夢朱

松兄　無腸

掛壁　警笠

叢鴉　芭蕉

玉屑　秋光

烟雨　夢三

田雀　九

壺墨　曉雲

白雄　凡

蝶夢　夢古

仏前花　秋のうち
茶除子　踊躍花
箭　子　箭子二百十日もつうし
曼珠沙花　松明の葉折
冬　花　やいと花
ふたもじ子　箭毋子
茨苓花　忘草花
刀　豆
甕

保吉
天竺
春亜
撫牡丹
旭光
甲斐　亜梁
毛氈　羽曇
備後　蒼六
朱英
江戸女　ちさ
駿河　方違

絲瓜　　苦瓜

葫蘆　　凡豆

扁豆　　巴豆

土朝　　下豉

胡荽　　九

黃蜀葵　　敗醬

冥王　　松

小兒人

陶望

絲瓜

葫蘆　扁豆　胡荽

蓑

椒

撒痘　　思仙

頌堂　　棠兆

治本　　宗陽

元參　　瓜坊

黃芩　　黃芪

大石九

華佗

朱英

秋

秋 擲

秋 蝶

秋の蚊のまぎらはしくてあるもの
蚊の名歌名文をとりやしれ
秋ぞうの是こそふてくらんありさう
秋の名残も焼れ煮て焼んとり
名残の名歌と集れとり 秋
秋の名残折そられ 秋の蝶
秋の名残のうへや加ふ 秋の蝶
秋の蝶りの名残のうへや加ふ 秋の蝶
秋の蝶りの名残のうへや加ふ 秋の蝶

大江丸
其翼
言長
朱笑
丈左
蕉翁 秋耳
梅園
養之
曉雲
蓼太
言葉

等位もひとしからぬ
一度ハあらそふ毛をふるし
をうし翁の
老ぬれハ呑くろるの名うし
をうし峯ふてあるとみ
鬼ぞうすうをうれーをうを
あのをん秋やうをうを
末広実 末広の実やうれもし計の
蓮実飛 蓮の実の名や蜂をうろ
うなむの夜や蓮のうえの
秋 秋ちるたれ月の秋をう
放 秋

仝
完来
道竟
護物
茶郎
江戸 嵐雪
紀ノ 五葉
麦ナ 斐文
丈左
尾張 路郎
保吉

秋

秋螢

秋蝉

秋くうて蜂ハあろうと覚たり　　春亜

秋の蜂ものうき羽音をすのふくと　　士朗

秋の蜂ものうき羽音をすのふくと　　文古

ものうきねぶり蜂の蜂　　白羅

秋の蜂二ツ来れバやゝ人ゝしく　　午仏

蜂の蜂支きるゝ　　其里

秋の蜂業のつかれやうやう　　平角

秋蜂蜂そのいそがしさ　　筑波

蜂蜂蜂もろこし秋の蜂　　双鳥

蜂くやまのふもとの松　　竟松

揚んてたてまた舞ふや秋の蜂　　竟北

秋の蜂花あるまのやを　　秋方

古竟

久蔵

糸継

完来

五厘

岡文

樗良

春亜

女きく

雄久

午仏

始めて秋たてまつる　　雄久

木のもとも尽ぬ秋の蜂

蜂のしづく也

秋の蜂大うなる人の気れみく

蜂の音ものうき

秋の蜂至りまゝなる

蜂の蜂迄ものうき

そつみてそつまでをしむ秋の蜂

よの枝てくまでをしむ秋の蜂

物毒をうけて蜂の

秋の蜂才のれを数するか

秋の夜長き事を歎ける

暁ばかり憂きものはなし

暁ばや左右の目もみえ分き

暁ばや物思ひ出されて物の哀れき

暁の千声の鳥もさりぬべき

暁のつれなき空をうらめしき

暁ばかりうき物はなし

暁の別路ばかり悲しきは

暁ばや君つれなきを歎くらん

暁ばや片思ひ歎く人

白雄

公

我圭

又門

士朗

公

公

梅宮

文方

月化

乙二

老ぬる身をうき物

暁ばかりうき物はなし

暁の櫓をそそる不知の又筈

うそそそをそや宮兵の暁ばや

暁のほの〳〵白む

櫛の歯のそへあまるごとく

暁ばやる音のもしほのそ

作山氏蓼を踏るごとく

暁ばかりの百のやそ尺ばかり

暁ばかりの一日ばかりや半の尾

暁ばかりの夏虫

暁ばかりの鳥啼

道元

公

一茶

素檗

一蝶

右橋

蓼白

樽屋

蓼予

虫

松出

鈴出

裏　生
蘿　期
蟋　悼

沈もれ水をたゝへ
もる月もすゝしきすゝきのふるつゆ
まだ古のうき言に来て松の月
すゞやかの机の椅ハいつ手ゐ
りまれ書あり子ほ楽
ほる形りもれ服つろれぬ垣の蓑　素
ぶりくすりなさすなり　桔道　芦角
さすまでや貧乏を湧る春　晩春
人ちき嵐よりぬりくます　仝
ぶりくれ叫やまき衣の竈の下　竟右
乗やまや掬もりへすぶりくます　友明
　　　　　　　　　　　　　　　沢月

ぶりくすり止てあまりすゝ
ぶりくすゝを呪て叫を沈　藥晴之
みの旅まるるあまやぶりくす　上毛　保吉
ぶりくすりやまや風あまる酒　伊勢　秀石
まりくすりやまや秋ぬてぶりくす　書酒
ぶりくすまで起て舞る　小毛　平八
叫ぶりてまれまる風ぶりくす　上毛　親宇
当たれに長うる風ぶりくす　勝石
明ちしや文光やまりくます　又明
筆のへとちれぬそぶりくます　下総　桃果
ぶりくすまで手れて乗風ハ叫ぶす　春亜

吉川
恒丸
士朗
仝
松先
樗堂
義道
仝
一子
冥々
娘分

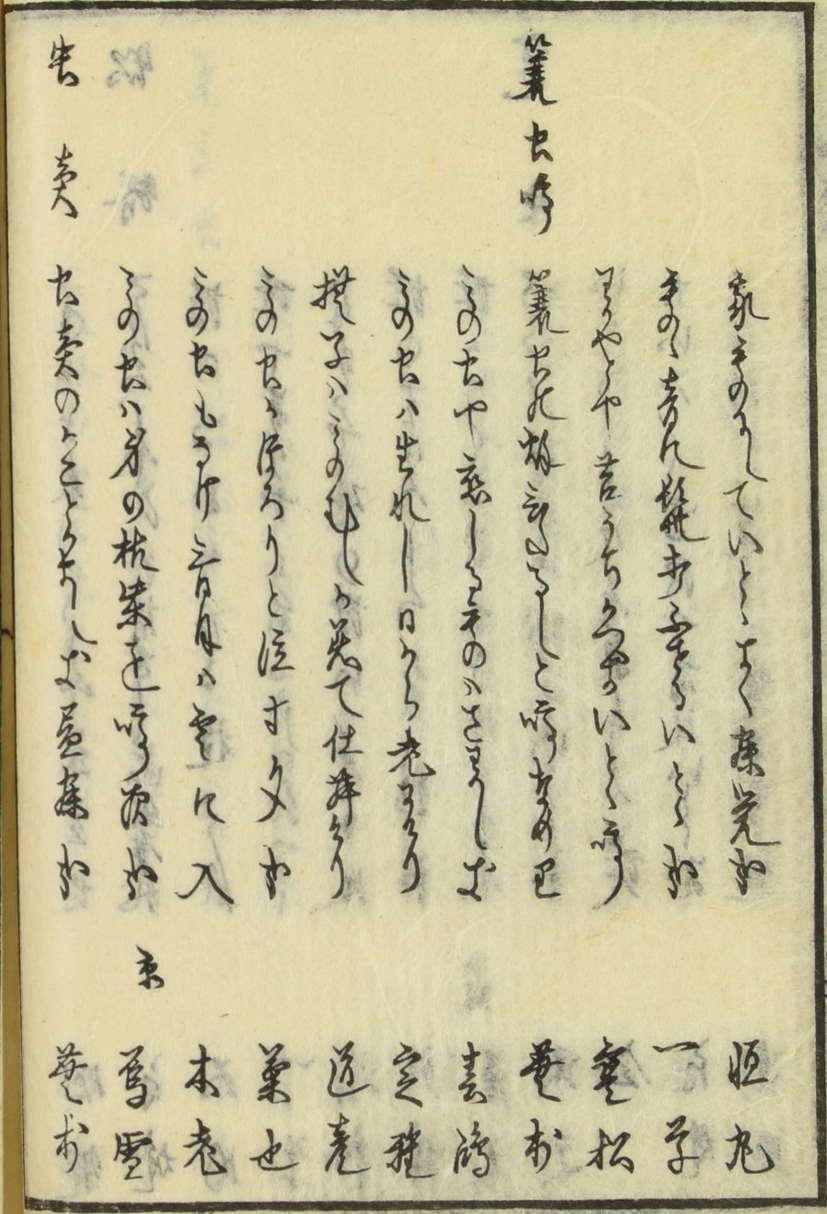
妾藤
仝
道彦
申兮
素卿
窓松
る乳
春兮
庚人
仝
幽晴

第三卷

まうくす吟不黄犬の浮沈こ　　等筥
まうくす森も黙あつハ考をしめ　　仝
まうくす桑もろもろ死ろ　　漫こ
まうくす蛩の上そ衣を吸し　　蕉白
その蛩ふたのふこまうくす　　一蕙
まうくすくの気ハ長い事の　　阿量
迄歩そゆくもあやまうくす　　久賊
いつまでも気ハおしまうくす　　芳こ
あ去こ茶三卷　　白堆
これも再のあろ孔茶三去　　天明
父母の色ハる迄茶三廿　　須明

蚓蟋

まうくす吟不黄犬の浮沈こ　　昭鼓
蛙の吟面めたる拍　　白堆
蛙や茅ヶ岳ハ雨雲の中　　天明
月ゆうやうあるきのくつく　　一笑
蛙のすころ拍いつまでも　　桂半
蛙こうくころ吸ハ去ちを印こ　　幽晴
吟つく蛩のにぬのいくお　　嵐文
いまうくよ去れり焼　　周更
ないろくく吸や方ハいくる　　仝
あう漬し宅るの贅の竹乳　　白梵
　　春亜



笹竹
笹の雪
笹舟
笹鳴
笹子
笹松
笹雪
笹の露
笹の戸
笹の庵
笹の月
笹の雫
笹の霜
笹の葉
笹の影
笹の風
笹の音
笹の声
笹の色
笹の香
笹の花
笹の実
笹の枝
笹の根
笹の芽
笹の節
笹の緑
笹の末
笹の下
笹の上
笹の中
笹の外
笹の内
笹の表
笹の裏
笹の横
笹の縦
笹の斜
笹の曲
笹の直
笹の長
笹の短
笹の広
笹の狭
笹の厚
笹の薄
笹の重
笹の軽
笹の重
笹の軽
笹の強
笹の弱
笹の硬
笹の柔
笹の粗
笹の細
笹の太
笹の細
笹の多
笹の少
笹の大
笹の小
笹の新
笹の古
笹の若
笹の老
笹の男
笹の女
笹の子
笹の親
笹の兄
笹の弟
笹の姉
笹の妹
笹の夫
笹の妻
笹の主
笹の客
笹の人
笹の神
笹の仏
笹の鬼
笹の獣
笹の鳥
笹の魚
笹の虫
笹の木
笹の草
笹の花
笹の実
笹の葉
笹の枝
笹の根
笹の芽
笹の節
笹の緑
笹の末
笹の下
笹の上
笹の中
笹の外
笹の内
笹の表
笹の裏
笹の横
笹の縦
笹の斜
笹の曲
笹の直
笹の長
笹の短
笹の広
笹の狭
笹の厚
笹の薄
笹の重
笹の軽
笹の強
笹の弱
笹の硬
笹の柔
笹の粗
笹の細
笹の太
笹の細
笹の多
笹の少
笹の大
笹の小
笹の新
笹の古
笹の若
笹の老
笹の男
笹の女
笹の子
笹の親
笹の兄
笹の弟
笹の姉
笹の妹
笹の夫
笹の妻
笹の主
笹の客
笹の人
笹の神
笹の仏
笹の鬼
笹の獣
笹の鳥
笹の魚
笹の虫
笹の木
笹の草
笹の花

れきいするやり蛇に来る雲　一笑

さもうる雲もうけしまの前　去笄

藻に鳴虫　うれしさに鳴音に流されるなり　丈左

草虫　鳴もまてまつに果る花苑の声　漢物

轡虫　物毎の寄てすりしたその声　秋史

道の辺や小萩にすがる轡の声　撰也

庭さりた　へりたる茶の湯はとしれなる　一菜

蚯蚓鳴　蚯蚓なくや松のむかしを聞ければ　輪之

篷吹　する人の篷吹かする築地かな　素鵆

初鹿　初鹿や急ぎて来るを出かけれ　寺千戸

狩出鹿　山がらもむ十人狩出をいふ鹿　漢物

鹿山の門　達出すや色にうつる鹿の跡　信更　蘆水

小鹿　萩折つ尾ふ志まつ小鹿かな　道堯

荒鹿　荒鹿やおふるに志けて流れ哉　漢物

鹿寄　鹿寄の人去きて鏡を待　不同

残暑　撲されいまの手につる姫暑し　公

怒しき暑さに秋も十日たち　米笑

秋の暑さ素椿の夏にまし　竜松

かなの花にしつまに残暑かな　篁老

なのりしやまうらす暑さ三日の月　一菜

ふれまつて残る暑や鶏の上　博友

片頬に秋の日暑し鍛　漢物

扇墨

捻香扇
寄

文の字も清くうつくしう萩の上
赤松の末こまやかに見ゆる秋景色
などの所扇墨文の字や清書人のり
扇墨文の字や清書人のり
田舎まれうすもしたり捻扇
竹の筆扇にへやあるりぬ
扇にと墨やすいのいろりくり
焼葉ふそて筆ふそも筆扇
竹の筆葉をを越てのりり
酒をもん葉ありそれ枝の筆
約人やまたてすその筆

云雄
六玄
朱英
著三
一弧
松江
井高
学芸
園立
白雄
公

題叢秋

白筆や筆の利てうつ 英朱
山寺やさうら男北約をめこ 公
初雪を染扇にうし端あめ 保吉
雪さめやあをとれいこの筆 公
白雪やそいふれてこの上 雄英
初月のうれる人の背の筆 天明
松雪やせいさその本指ル 公
雪うしや指枝を折て取る人 二柳
白雪や関れ指れい情ん 松魚
白雪ハ芝の上の名うへ 自楽
公

鉄釈　百家の中よりえらみ出したる物がたり
姫九　百家のやうに長くはなけれども一ツ〳〵に
仝　百家の上をぬきんでたるもの
士物　百家の上を落ちて秋ふかきころおひ
仝　百家にまぎれ混雑到て筆乱婦
仝　百家にもるゝ小冊子
卵夫　百家の数ならぬ物がたりの集
女業　百家の言をもらさず載むれたる
仝　百家の上を抜てすぐれたる
嫗国　百家の中に在ながら百家の上に
英二　百家のつゞきものにて出たれども

百家のもしほ草にもれたるを拾ひ
百家のうへをとるにも志ばし
百流の上をそゝぐ
すゝもしや百家の上に
百家をそゝぐ百流の水
死に枕人そうれ家の秋
百家に座を入る住れ
仏の枝ふるさと荒て
亜家の時雨やるのゝ
軒もる夜半の
玉箒　百家の中に
撰定　百家の
仝　百家の
馬卯　百家の上
外六　百家の
書誌　百家の
朱英　百家の
仝　百家の
業孤　百家の
乙彦　百家の
甘谷　百家の

晴しこそ嵐そふ秋の雲　荷三
白雲や鱸のうる住吉　　〃
雲凡や松そうふ夜のさ　振舟
河芸や秋の上り乗合　　一茶
雲とそ秋の流るる焼野　　〃
秋の雲水もや河内ひさや　乙二
秋らくや鹿のおくれ引　　〃
ふた秋の空うつ秋の雲　　〃
的うて位ありぬ秋の月　　〃
凡しらぬ雲やそうふ秋の雲　道竜

降る日のかうも変や秋の雲　〃
夕〻や空もめうとめ秋の雲　〃
月の雲をおもふ夜もあり秋の雲　〃
白雲やよるは焼原おぼろ月　〃
匂ふとは雲も在洞ぬ秋の雲　〃
白雲のおくれ来ぬる秋の雲　〃
しら雲や先のつゝめる秋のそら　〃
下弦をまくれ入ぬる秋の雲　〃
白雲も打くやめそたや世の色　素郷
夕〻やいつの丸ぬる大のそら　古高
猟好のその名たつる秋の雲　一茶
　　〃

美乃
菅笠
仝
雲雄
菅原
護物
彦人
飛鳥
幽晴
陽乃
業也

松蓼
一葱
秋長
喬細
梅便
冥也
辛夷
允十
朱溝
廬左来
掬的
亟銘

秋の雨世を老人をめぐり
秋を見め人や氣のたゝく
秋さし村の鹿れてそそ
手のとひり立り秋を
月秋や四十る人
待る秋て虫をとの
秋のそし林
笹の露笑の
つゆてひりや風
鶯のきるしつけし
大をもしまる

伯先
源中
綱公
躬恒
小花
女鹿
古元
古静
信実
権花
仕る
尚古

降ほりくる
人ゝ秋の見て
秋の手月晩
並秋や人月
月秋に落る
小雨も遠
そのうそ
曙や秋と
行くおや
世の中ゝ秋
四宗の暁の秋

作法
天什
賀茂
一條
養嶺
藏人
白志
素覧
射毛
季吉
季道
爭
業更
清原
枕慶
詢足

霧

病妻

病つまや　いしふみめくる　夜の秋
病つまの　枕の夜の　いとゞ寒き
病つまや　いまも夢路を　通さる　秋の夜
病妻や　窓を通さる　風の音
病つまや　うとうとしてる　夜の秋
いつまでも　元気を出さぬ　病妻か
病つまや　いまも数珠の　夜の人
いつまでも　病妻なるよ　秋の夜
病つまも　それなの夜の　白菊か
いつまでや　盃　含をし　松の雪

吉白
蕪村
蕪吉
園女
几董
白雄
公
保吉
井入
鶏口
花縣

病つまや　死にせしよ　夜の松
こゝにあれ　いつまでも　病つまや　海の上
病つまや　月見る　夜の海の音
いつまでや　病つまも　月をそれ　小春
病つまも　白ふぢの　夜そうそう　井
いつまでも　病つまや　夜路の　雨上り
病つまや　人の　まくらも　通い　夜の
病つまたち　いつまでや　月ふかし　夜

士朗
公
春亜
公
跡六
兄玉
友國
一碧
紫英
公
岸花

初嵐

嵐つれ過るやうさし二日月　李天
柳つまや母のまもし女の子　伊勢 文幾
嵐つまやされハ見えのかのおも　不騒
嵐つまれ見つけられても蔵　出羽 尋風
夜寒嘆て稲刈のもとも初嵐　自憐
古池やめれとん聲す初あらし　保古
初嵐被着人の妻たりけり　書岱
書見と夜も見ゆるそ初嵐　光松
簡方へ猿の吹之初あらし　但馬 光揚

秋風

秋風やとんと家あるまの秀　陶更
蝶八や人の行けふ渕の系　蕉古

秋風や干魚つけたる浜庇　蕉村
蝶風やさらも夜のまんた浜庇　自憐
秋風や鶴の類ふへ寺のあり　暁寺
柳まも折もとんと蝶の風　樗良
秋風や椋ハ男子の越後絹　几董
笠まや秋の物売りつり来る　書蘿
蒲の葉のちし絶し蝶の風　丈岡
山道や時雨して吾秋の風　岱書
秋風のかけ立もとうしろ　仝
毛衣の岩かるる米の秋の風　雪江
ものなりて夜ハ寄ちし蝶の風　蕣石

小菊のにの
まつ〻〻名のつきたる秋の月
竹それ〳〵大ぶし秋の風
秋の月人〳〵の良夫てる
秋月の夫つ〻しうたひあか
河原やゆり起されて秋の月
秋月を見ばらんそう
秋月や角力とり大男
秋の月や実ハのつれも秋の月

夕汐　江渡　加賀
人家　丹波　六合
亜流　詩嚢　詩有
淺妻　活物　乳
車地　松江　松江
女房　魚心　秦補
女優　公論　乙道
海岸　医家　深雪

詩田娘

主撲

花火

おのてうれいの恩しま角力おも
ちるう角力ちゃそのお井
猪うられ見のまあるまふおも
名まるひのおもうすめ老角力
投まも見むもあや角力元
花火ちつり来や自ま玉河
夜ハ秋のそしま花火お
川面や花火の伝の撰の考
祭る万も祭ふ万も花火お
花火ちるハの主まふまく
老の相嵐花火に近れり

排衆
ま光
陽ろ
我見
尚ひ
月的
白地
会
菟古
保吉
寛松

士的
丈方
義望
屠蘇
月元
篤く
一瓶
遊晴
為頂
業也
外る

花火在八丘の英人を尽くそう
私う気の星を落して花火お
芋の茶嵐花火これ花火お
又色代茶をつい花火お
幻七五あ花火気
永知火 しら色火の老七うる辛カお

望藏 九万里 陳与義 李尺 児将 康人 瑞弓

俯読農句歌業秋中

八月 八月や業八英色七うる
八月やはうりみ赤もしき
八月や十日七ちこそ の心
いつ九白もぞこれ子の気抓
いつや九て赤うして赤ます
いつや日菊れ訓一花すき
いつやゆうりよ赤の完
葉月 妹至ふれ白ふ来なお
芋の茶の立て九食赤ふ

桂五老辨

洪仁 士朝 井六 湖井 桂葉 漫く 陽弓 政二 長葉

竹去 枝も出て丹のまれに入りぬ
八朔 いね刈やそこら聖もうれしかる 伊藤 湘芳
いね刈や爰も小百姓自慢哉 義左
いね刈のそこら猪共横臥 楼元
いね刈や蜻子をしめ合ふ 双二
いね刈の旭小春をなでまわす 有亜
丹ぬるや神代もかくやふる柳 土朔
いね刈や菴もそこらの笠 道恵
いね刈や夜やうやうの子守唄 営谷
いね刈や氣に入る田の嵐 竜松

田面
名月や刈るよりはやく来たりけり 天老
田面のどこも医の気智あり 暁雲
雪明も出し田面のうつくしき 自楼
名月やそこいら猪の足あと 洗々
名月や芒ほと折て挙 不知庵
八月朔日関に採つて栖の花 春渓
いと老ふたりぐらしや 仝
朔日やそこらの子ども越る 斗入
心算や出るより早き朔日夜 士朔
妻女に来ぬ人来よう朔日夜 楼竜
朔日や高燈籠も死人のうち 道恵

二月

二日月

紀友

月家の月てこそあれけふの月　康也

笠ぬいて黄昏見せてけふの月　観之

けふの月の夜も忘れぬ底敷かな　江戸　鶴逸

何事も不足なきことの月　伊勢　岳好

けふ月や連歌してゐる舟の上　陸奥　揚白

けふの月ハ外の光にはなれけり　尾張　和平

夕月

ほそくと夕月よする芦辺かな　斗入

芦の穂に及ばぬなる月夜かな　存亜

山寺や暮連ありての宵月夜　揆也

待宵

待宵や気葉の調の光　柳丸

まつ宵や泣くれさら人し　蕉古

待宵やゆめしなき芦辺　蒼　白雄

まつ宵やむかふの月も見て寝し　存亜

待宵にそ抜れたり新あやめ　一瓢

待宵ハいくら掃ても落葉　千仞

待宵や大事にかけり月の光　一茶

うきことも月見つゝ月を待夜かな　帰牧

待宵や湖ゆく空の光かな　道彦

出来ての十五夜見へず待宵に　全

十五夜や筒のこゝろし蕉　蕉雨

まつ宵や月代剃てはせめく　康人

まつ宵ハうれしさの木の芽かな　甘斉　其矢

待雪白

名月

存亜　全
諺乙　吉岱
士訥　河羅
全　白瓦
長翠　完来
挺又　年仏
牀仁　蕃朱
業兆　蕃二
楞生　羅望
朱英　全
全　全

名月や提子の銚も出て来人　一子
明月や烏ハ鶉らしき鳥ミ　仝
名月や西に東に小の人　冥々
明月ハすこし昔の句なれ哉　乙二
名月や小めくら座頭の訳　道彦
夜アも秋盛も又娘の月なるら　月花
名月や底たちかする汁の雲　岳輅
明月や人の深山木花構子　仝
名月や哀れとふ月ハ銭二人　平角
名月や来る今宵のはりうき　素鏧
明月の夜を寝よと哉　寄劉

名月や夢にかゆる雨の月し　蒼ミ
明月や後白の藤の寺　哀丁
明月や水中の鳥の花建　桃里
名月やうしとかれぬ地の是　寛松
明月れ枝うつりするひ路哉　鶯笠
名月さ一足よれハ未ヨ哉　仝
明月れ武かくれて葡萄棚　魯隠
名月や明れハ光の露すゞ　見金
明月や汀ある出てもり坂　帝人
明月や横さ流すも娘の畫　直麦
名月とはふるおそよ手例哉　一茶

同人
女志字
梅川
淺物
井有
施示一葦
井波
一慧
井庵
陸奥井路
志波

今日月　　樗良
仲庚の光をふきちらす　　蕪村
花やかにみやもる　　仝
永つきをふく子うし　　青蘿
さゝくのんのうへやうの　　二柳
六十の眼もやうやう　　文明
晩の白もあてうつ　　大江丸
うのはしをもちうつ　　春亜
美代やこの上うつ　　士朗
きゝこゝいもさゝ　　昭夷
海ふかてうつ　　松光

永まいつまの一　　琢六
尽ふ初てさや　　樗良
うつをといふ春も　　仝
春たゝる水も　　宋屋
芒折てよのかな　　巢林
うた月入うつ　　文古
むつ一させけ　　喜手
うた月不死の　　羅里
海ふかやうへ　　仝
百まも活てうつ　　大阜
うた月さゝ　　道光

たちそ風の白尾花杉なりみかの月　栗也
寄よりも先へのぼるやみかの月　女 濱藻
人々の姉とやいはんみかの月　是竟
汲で涼人見きみかの月　越後 文喬
請ちっ刀提しもみかの月　叢嶋
みかの月花見る原の光かな　能登女 了草
冬ありあら蒐も来るみかの月　摂州 擺左
月のふる文アめでたき初鳥　古節

新月

新月の影すましや十三夜　平角

月之宵

月の宵あるしの叢辞出る　其求
月の宵れ為毛れ在秋残ん　白樺
ゆふされば月の朝も宵の風　菁之
月の宵花もあくまで闇し　来卿
月の宵鈴吹風も見えずそ　道竟
家鳩の鳴くもなき月之宵　仝
月宵れ宇霧あれ荒あれ　津軽 了年
宵よれ八十夜之なりと旅ごさり　三化
月之宵闇八岩戸へ入れなり　吟舟
荒布の豆磨き居月の宵　文渠

名月

光あり月は中より深き名月　闌更
杉へ入ル月満その庭あかり　白樺
名の月まさりけ合ゆかぬ橋拵ん　存亜

十六夜　いさよひや雨よりあるる末この空
いさよひや雲こそ寒の空
名所一あらくに欠り月も秋
十六夜や雨うちそれの夜　芭蕉
既望やさそふ人なき袖の秋　素堂
十六夜や人を送りし松の秋　保吉
十六夜や野ゆく人も竟つ　亜欧
十六夜や鼻の穴にも月の影　石門
いさよひや人たのまれぬ秋の空　入
十六夜の月にねをする鳥もがな　士朗
十六夜の月に別れを告る鳥もがな　松兄
十六夜や窓に別の月の影　義望

既望や月のかゝりもあへぬ　仝
月さやかにいまでさゝぬ戸も　一茶
既望の月不足なき夜半かな　乙二
十六夜やそれも月の名ハ女郎花　道竜
十六夜ハそれも月の名ハ女郎花　仝
十六夜やそれもうつろふ色の露　学笠
十六夜や雨の雫も秋の滝　素堂
人さまざまこのいさよひの月　仝
おのがじゝ十六夜ながら十六夜　魯隠
十六夜や雨も月なる名ごりかな　葉子
十六夜ハそれも月なる名ごりかな　石門

雪月

十六夜の月をそうん小白か
酒うけのそうめんとうふ雪と
雪の月
よしやさうめんとうふの白さ
うめざさにもる雪の道
ありがたき雪の御の白衣か
隈やすの月を待月
雪の月
雪の月

明雪白

白のそう十六夜のやうさま月のかな
明るのやいさよふ秋をそそぐ
いさよふやをそ月そ場の時りは
十六夜やそしる松の月かな
松そさしいさよふの関の破れ波
十六夜や拾ひあてたく猟の船
十六夜やこれより秋のさしそめ
十六夜のありうすそ光のし
十六夜や境へさうる雲の夏
十六夜やさしそ堂之縁の月
白のそう十六夜のやう寒支あん

至要
雪人
護持
編そ
子國
食菜
撰姿
能勢
尼河
李庄
越は
東嶺
白樓

土物
松乙
膳氣
後明
書元
摺元
勝石
走川
宇拍
万和
晩意

秋の月

芦の屋も過ぐるそらより　陸奥　呂樓
よのそらの雲やたつめるやまの月　出羽　巴陵
洪炮の地響しるき夜半かな　外古
久方の雲のつまくれ夜半　陸奥　たく
森ごとの文月ぞらの月　惟平
はしたれの子供の声の遊ひ　一茶
しばし老てふるまめる月夜かな　枡麿
氷ケ八月の光にさそふ　近江　玉英
雲うすも羊巻さくる夜半　河内　徐業
走り山の先ぶれ出る夜半　伊勢　志完
月のそらの雲やたつめる　石鼎

秋の月

石山や雲に出る秋の月
秋うすく八方ふさぐ月の出さへ
都ハた秋一まいの月おぼろ
むらくと尾花にさはる秋の風
秋の雲や月に押あふ初嵐
凡そ天てみれハ秋の月
栗毛の尾ハ秋の月
秋の雲ハ月をかくすそ月の雲
山里や引ぬく音も秋の月

作院　古皐　石鼎の舞うれ
古井　晩香　月のそら雲やたつめる秋の舞
保吉　徐業　月の出さへ
徒吉　斗入　秋の雲ハ月をかくすそ
大江丸　春亜　凡そ天てみれハ秋の月
土朗　帝云　山里や引ぬく音も秋の月

月見

よひの雲の白れそうめ秋の月
名所ならねど秋の月
雲霧のかゝらぬ秋の月
大空ゆへ秋の月
約の末迄そもそも秋の月
昔より今も秋の月
故をよめとてあるにはあらねど秋の月
うき世にうめあり秋の月
秋のうき世の住うめ秋の月
更りや柳ごしの秋の月
氣そのものゝやうに見ゆる秋の月

奏そう　杜甫
後拾　第三
遺人　万葉
石清水　里美
高砂　芝垣
等連　葛城
久藏　尼
元元　河辺
住吉　信夫
芝邦　北濱

ふと人ゐて笠ぬぎて起てゐれば
十六夜もさて更ぬ立ちながら
月見てゆけハ淋しき小橋かな
夢麦畑もちるやうにして月見ゐる
打よせて月見る舟もちるやうに
散ちつゐれハ月見ゐるもうら
掬ひさして人目にそむくかな
まくやハ月見の客の寝ざまし
等とりくらべて月見ゐる
芳合れて百発百中月見ゐる

金
士朗
金
松兄
挂五
南天
栄英
子翁里
廉古
露橋
英一

ありくとあるきつかれて月見ゐる
このゝ中やうるさき月見ゐる
月見をさそふ手もうるさきに寝て
山里ハ罷るも月のつゝしみ
小ぬかの雨ハ月見ゐる
月見ゐる一の人
たゝみこと人れ月見ゐる
月見するうしろさうし笑の客
追分るやうに連立月見ゐる
月代や見てゐるうちにひむり
吹をめ人にすゝけたる月見ゐる

素籍
道彦
金
蕪亭
子容
寒松
雪笠
桐僕
春甫
亜仙
為頂
芝山

菊

世にうるる人もと菊のふ
菊のふ日和あり七日ありう
ち菊に嵐吹るつゆ日和
なれなきうち菊をさらす
菊九穂ろく乳ろうち菊の
光ぶくや秋のかんを菊の上
菊なんとつけてるの首
いかうけてくいかうけつ松
さ波の地もあてそれ菊の相
菊こそ狭に咲ども又日和
菊の更やされ八二夜さく杜若

相摸女

菊の秋

秋ぐ〳〵や菊をのく〳〵の秋
菊ぬくへくうり出てる菊の姫
菊の殺汝さをれ霊れおも
さろうにてつぶそ迫いかの忘
菊九忘れの旬もそるし

尾張 園暁

菊の花

いかの忘八君とおもふ民その旬れおも
ふれのそてれてゆうう菊のふ
汝の菊の花をさるうし月おもお
こうるとれ自分の菊の花

書元
方秋
姫九
庵古
陸奥
白雄
春亜
樓古
乙二
武陵

鴫の立に松風ありけり夕哉　壺玄

鴫足の片足寛なり鴫の羽　魚文

そゝさ風手取れたり鴫の秋　遊子

子鴫

鴫よする堂や口まとも日和　廬杖

まさきの立やはりあけたる年　菊三

まさきの立や鴫に暁つまをすへて　道考

晩鴫

ほつとして葉山立ちける晩鴫に　蝶夢

花折て月まつよりも晩鴫哉　存亜

鴫刈

鴫刈やの見れハやる森よけれ　白雉

鴫刈の音中よりの来る之　存亜

鴫て や刈や田に冀ひ夕櫨　士朗

家立て揚れするる田刈哉　樗堂

鴫刈のうしろ見まうる路哉　祥禾

鴫刈て出も道と来れなり　女 百梆

古湖秋の名れよ一男哉　平角

老ひり田たるれる月夜哉　上野 百竜

雁擬

池寛して立ちる空れ雁擬哉　葦北

木の雁擬山の木の実の数哉　保吉

晴の雁擬見据られたる西日哉　存亜

毛見

十分の秋やゆるし毛見れ哉　斑雲

夕月れ観てりなり毛見の興　信濃 納民

鴫舟

いろ子そやいなとにふしれさし杜れ　蜜松

いそのかみ古き都の小松原　仙香　治雲

夕風や誘ふも寒し姥ざくら　蕪左

夕雲と見しは散りいる花なれや　大暁

秋いまだ来ぬ日数や延ぶ道遠し　延

駒つなぐ柳や垣や城下まで　亜来

城来ののちも延ぶる一株　一桂

新来もまだ旧れぬ風　晩風

困るまで客を泊めたる小家哉　凡董

もてなすの楼たてつらねたる古宿　堀前

夕雲を花と見つるは木犀の花　木犀花

木をいのち白にあらはす芙蓉かな　芙蓉

芙蓉見てあのふ芙蓉みりうめ　木犀花

白芙蓉散ぬ前にハ氷ふる　花

ふるうちも小あす迄ある秋ぞ　枯尾花

見るうちにふるんうつりし花のかず　枯尾花

すゝきとも枯尾花とも呼ふべし　乙二

檀特花
紫　苑
鳳仙花
翁阮花

檀特花
紫　苑
鳳仙花
翁阮花

不忘るゝ秋をしめくゝや新名所　　曼方
新名木杜ごゝちつゝのゝ　　来雨
新名所のこゝろやうつるけむ　　乙亮
新所名流もあるべき澤の氣　　挂丸
新名もそゝろ人岸の俄人　　老竹
新名やそゝけいろ　　ノ旦
雁来る　　受水
鬼灯　　晶吉
鬼灯や法の生字　　机
鬼灯や美しさうなものゝ中　　春人
鬼灯やそこつでも君ゝその　　蘆
鬼灯や一味ゝ秋　　志げ
繰返す　　乳牛
来ぬ人のくれ殊更　　雲

白萩や　　李峰
秋河業　　柳雨
秋河業草ゝの名ゝ　　天明
秋河業草ゝのくれ来ゝ　　長翁
ゝのくれ秋を　　竹法
小萩のいつも雪　　一弧
萩河業雪れ秋河業　　箱鳴
萩河業雪れ十萩河業　　孔策
ゝのくれ長八　　桃也
養雪て萩河雪　　角来
京の名ゝ千れて来ゝ萩河業　　蘆雪
雪ふるもゝのあれより上ゝ　　養空
鶉上ゞ　　悟平
鶉作実　　悟平

落

菊の花　三絃の十歩にたとへて菊の花

花うばら　花菖蒲の葉のごとくにて菊の葉ハ

花菖蒲　花菖蒲ハ沼地にてもおそだてうる小ぶりの

菊　　菊の花咲て枯るゝまでハ

きぬ〳〵ハ　きぬ〳〵ハ菊ありやなしやたゞ

菊ぶれ〳〵　菊ぶれ〳〵ハ菊の

うら〳〵と　うら〳〵と小ぶりにて

汐等れ　汐等れハ花たゞそのむ

菊の衣　菊の衣ハ菊の花出るやうのもの

紙雪　紙雪ハ菊の花

夕虹　夕虹ハ菊の葉うつて花みる

菊水　菊水ハ菊の花みる

對る　對る杜若

大和　大和ハ杜若歌

信乃　信乃ハ杜若

左楽　左楽ハ杜若

石菜　石菜ハ杜若

亀文　亀文ハ杜若

瑠玉　瑠玉ハ杜若

菊松　菊松ハ杜若

國村　國村ハ杜若

栗静　栗静ハ杜若

成金　成金ハ杜若

全　　全ハ杜若

菊右　菊右ハ杜若

菊市　菊市ハ杜若

全　　全ハ杜若

保吉
成書
春亜
斗入
大江丸
士朗
仝
樗堂
仝
道澤
翁路

桂女
呉山
宋艮
支國
完来
甘谷
圭牛
乃二
仝
月化
道光

会
一首
寄葉
菅笠
寄関
旅宿
長雨
一首
窓松
無題
会

未郷
晩蓋
蒸白
蓼
牙城
秋雲
淺茅
鶯雪
柳風
会
未既

花芝

尾花

さそふらん人の心をしるべにて
嫁入の日吉を祭や秋の雨
一人つゝ指を折るや秋の暮
頓て又折かゝりけり冬の蝶
寒の道ハかどりけり尾花原
そよ〳〵と尾花ばかりや秋の風
いろ〳〵と尾花なりけり秋の暮
江戸〳〵ハ尾花なりけれ共人
市なれバその中貴てのる尾花哉
花すゝき蒼てのる尾花哉

花芒の幸とへ一ツ生のこ
うそ多れんうりめ不 芝
花芒人のうち髪も乱るゝ
恨多れうそ多うそ花芒
乱つゝずれもうてふ芒
清と陸と雲ハうそ不芒
郷一さそ考のうそ不十分
秋三月月虐れうめ不芒
うつうそハ京れ老うん不芒
うそハおれうそあれ不十分
戻るまれうれ然むうそや不芒

竟松
申高
秋末
幽晴
椎宝
梅周
之河
巣也
左文
常世之指
尾張 賦古

拗庵
傷中 壽亮
手眉
古帥
百明
跋美
白雄
一子
道彦
庵人
美芳

芒薄

人里は何ゝにかゝる花すゝき　京　其楽

露ながら尾花が上の風起る　白考

尾をまくら鶉しどろに直垂かな　應々

芒からそ手にはかくし流いつ　暁台

芒萩にうれ皆あはれなる夕かな　士朗

湖にされぬ人不来辺の芒かな　仝

芒ちるやみや人送る人帰る　他力

苅萱

かるかやはまぎれ秋の花なるぞ　闌更

刈萱といへる名に出てよりぞ　蹄石

かるかやは手も取り小かげかな　斗入

かるかやの花を乱すや風かな　恒丸

花ちらば乱るかやかくもがな　秀里

かるかやの折れ入る露の下　道彦

かるかやは淋しくもなし花の風　完来

かるかやのざまあはれ昼乱れて　芝山

山寺やかるかやの上を鶏はす　き々

刈萱の乱れ入る露は羽おもむく　君滌丸

かるかやの分けしもかれは寺せむ　牧長

かるかやの末なれ色る月は　本鉄

藍花

藍の花又暮れて見ゆるかな　来既

露草

露草や月分けておそ縫うかな　江戸　呂暁

露草は色を染ぬ山の光　兼世

野菊　州干の方に出る草也
　　多摩郡
　　全
　　垣外
　　一名
　　道元
　　秋七草
　　仲秋
　　古文
　　東洪
　　稽神

多摩郡
　　道元
石女の陰に沸しるしたるを
　　仲秋
秋をしれ松ふく風のたえまを
　　年按
半虜花
　　玉屑
古屋うら吟やまぬ虫の秋
　　玉屑
ふるりや乳川花
　　玉屑
一すじつゝ世に幸ふ葉の雫
　　玉屑
雫の玉ちる迄や
　　柳亭
風の雫岸変ふるを自然
　　晩霞
雫うる八重女人の姫
　　白姫
雫うる折れ泪の小
　　全
笑ふて雫のこぼるゝ
　　麦尾
　　道澄

椎栗てさゝうり瓜林の等
木梠しゐさゝ等の苗
梅干を等
瓜
爲さ瓜

長芋
上ゝ
布什
邊産
白境
野山
古産
富等
奥古
仝
萩亜
邊靖

葡萄
冬瓜
秋茄子
羊

零餘子

うま瓜すゝうり
菱ひし八邊
爲うり
瓜里八ゝれ
邊りゝ梅
かもうりを
梅ゝてゞ
犬のふも
麻ゝれ
蛸さの
的等の

申爲
屋敷
奥松
邊産
宍ゝ
芋ゝ
貞佐
麻又
奥松
邊産
宍ゝ
芋ゝ

この句は葉さへ走りぬめりて波　呉先

十はかりぬめりて折れぬ松はなる　性孚

菎蒻花　こんにやくの花は肩まで女かな　素迪

間引菜　間引菜は頭まてちさき山の風　米英

芥子蒔　風の手をあてゝけし蒔く月夜かな　又蒼

粟　振さしの杖うかれり粟の穂　晩成

粟の穂のあふも波は返れけり　古翠

粟の穂にかゝる燈の夜の風　道恵

粟ちる也葉てのそれ大の声　万和

粟刈　粟の穂は立かゝるを刈れかれ　月化

黍　黍の中嘆しての来る　道恵

蜀黍　たかきびの折れ出てゐるすゝきも　可布

蕎麦花　浦の風のうしろ迄そばの花　葉考

古てや雨はあまくとそばの花　仝

燃ゆるの月も煤やそばの花　董左

一かけるへ二かけはそばの花　桂又

そばの花十日ちがひきりかな　伊勢 周蕉

表札てみるかそばの花　尾張 玉阜

のあくと混ぜるそばの花　葉兆

そばの花世はあく人の嫁りかな　丘高

山畑やさくまでそばの花　卓池

化されて眺めは来しそばの花　輪之

壬戌七月一晩あそびのそゝ肌
蕎麦刈
新そば　野ごゑ小舟の上
菜畑　花そばを入て不菜汁
首机場　打ち鼠鼓
木槵刈　秋も不一ト白ざくさゝ
初汐　忘れまじ言葉ありけり
　初汐や貝のうつくしき

初汐やかゝれもやたの子　乙河
初汐に追ひ出されてゐる小魚ゝ　蕪村
初汐ハ癪にさはるはうれゝ　去来
初汐や芦切ながらして鳴　旭九
初汐や打のめされてゐるの口　菜兆
初汐や添てもらひ度うら　道彦
初汐や磐うつ波大ゝ　去迷
初汐の寄くる音も帆ケ岡　旭九
　今年ハ白砂くしもふり
　積雪て庭石見えぬふゆ　蕪村

二月十日

二百十日未に掛ひさの老ぢん
二百十日ぬれ日のてり　ぎく
放生会
放生会　放生会この夜物ごもあり
放生会　放生会小魚や　代語
放生会　放生会ゆめ　古語
放生会　放生会ろう　老ひ
放生会　放生会か　下略

豹
豹
出
擣衣

豹牽　豹牽やけて早婁の星男
豹牽の笙の星ぞろぬ風情之
豹迹　豹迹こそやし　氣　白
豹迹　豹迹こそたてゝ豹迹
豹迹
豹牽　豹牽のこそ豹迹
出代　出代やこの季も夏ぢ
擣衣　擣衣やこゝろゆく関ゆる
擣衣　擣衣のこゝろ
擣衣　擣衣ぬれそうや
擣衣　擣衣ろう
擣衣　擣衣て
擣衣　擣衣来て

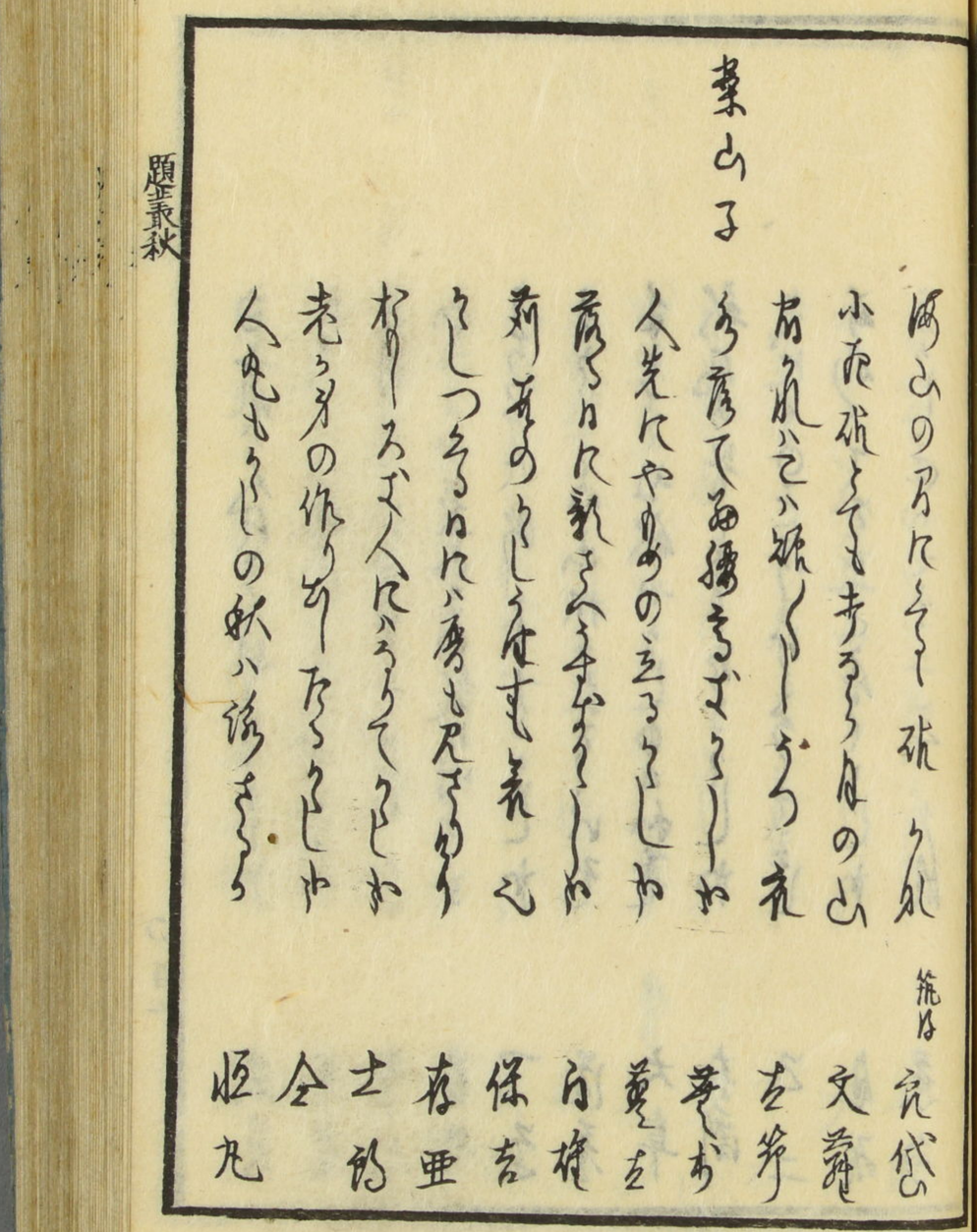
月れくる月の棟やかゝ花弦
きうしらめ望うう手かゝ花弦
永衣うう手かゝ花先
弦のそうそれたるでめるかゝ
と勧られいかゝ七のうれ弦かゝ
るのつうこめる弦の布かゝ
飯巻の弦うう晩うう
月れいて男八寿うかゝ花弦
末のの一のいるまそかゝ花弦
恵ま糸をき手ゑる弦かゝ
ゑまよ弦に乱る就髪

全
白旗
弦書
不明
仏紀
書物
宅厚
在亜
全
大江丸
雲石

弦手花を
就ぎそやかゝ
ぎめる詞書
小花弦関
小花弦月
弦うてハ先
里人の海
いさうんのそ
夕山をタて
弓松やかゝ
吹うそまうこ

分て添ふ月かゝ
時白の書弦
手人ぐりも先心
のれうハ気うう
のうさも書やか
板うれ
流れ来てはやかゝ
て手弦かゝ
て就手かゝ
ものあう
やかゝ弦

飛塵
垣丸
全
士的
全
不精
年人
の数望
書牛
一字
遠意



落ゐる

河上の石たゝ水 流る
小夜ふけてもゆく水の音
有明の月こそ水に宿るらし
多摩て西瓜をざるしめ
人先たやりめの立るうしめ
落る葉の新さをしめ
新米のうしる哉 心
うしつゝるれ哉 心
かりそめ人にうつてうしめ
老う身の作りめ
人もうしの秋ハ深さう

荒井 元貞
文麿
古等
英子
英吉
白梅
保吉
春亜
士朗
仝
姫九

白雲ハ人ヲ
松ハ久ノ橋
百姓ニ
山中ヤ
うちつけ
立ちしの
まもさめ
秋風の
矢にそ
あれくて
立ちしま
七十二
九月

宋英
完来
午仁
吉牛
一子
道意
大鼻
寄閑
乙二
自死
意白

雪

ふ

泉あり
ちをま
引あけ

石瞼
少女
老松
素迪

筑子

武秀 蓑ム
秋夫
素琥
又駝
夢村
仝
夢古

詩歌引抜

几董　三河　巳湖
保吉　後嶋　蕪村
秋色　藁太　梅共
又四郎　唐崎　白雄
士朗　一笑　無腸
呈箇　道彦　夜松
朱英　午仁
祥禾
道彦
仝

漆多学の中の抔漆あり

越後のものを初とす漆あり

やうな木漆あり

打割るを漆こゝろみ

こゝろに見ゆ来ばく漆あり

蛻皮の楪のごとし人の上

り今そくろうあり

帆のうふすのごとく来ばく漆あり

漆うりの小箱と来ばく漆あり

漆子囲をそゝとうあり

白もの小町うあり

焼皮

焼皮

追加

魯石　伊勢

蔓去　剛移

白桃　幽晴

几董　蔓去

仝　里雙

乎我　菊圃

芋む

おくの奥へ行ほそ道

芭蕉

小そなかそ、馬つかそ

これ見よ抔るふやすし

あすよ見んうら

庵一つるらまも

夕この小まくそ

うそそそそ

うそそそや良抔る時の秋

抔をりも二百れ

暁のうす抔れて秋

仝

芸路

一笑

帝人

文角

布席

素堤

百岳

遠光

来英

妙庵

一葉	園夕	
六龜	春亜	何書
玉筆	道元	
月化	長寸	
桃園	斗白	
黄去	全	
晩雲	白桃	
低書	文明	
琴石	春亜	
姫丸		

洞梱を嵐のそゝるあさけや
幻にもる吹うさくもあさけや
物めーの語りに来めるあさけや
雨そゝく歩て花うり至白し
ある院に養月ありあさけや
氣有の路ふしうるあさけや
ちる雲雨のそさる月ひかる
物そる乳りやあさの己の秋
白酒の色雅にあるあさけや
人の来てうれいやそあさけや
拾ふ人拾ふそりくあさけや

完来
菊望
一子
来卿
道元
仝
一菜
核宅
竟松
梅万
来院

病室

朝稍にあさの元気れり
ふにさるそのうちあさの林蔭
るるもんれうあさ
計もうあさのもう境をる
あさやあさ
月の末にそあさけや
非高うしろ乳あさ
氣良のる乳あさけや
雪さ一義りれて
未にる月のちうも雪さ

陸奥 芳子
乳は 菓思
儲は 梨陵
八十翁 風宝
越は 比江
公孫 佳水
上総 百十
智識 弓極
秋去
石島
下総 九花

秋

秋を
秋を
秋冷
下冷
身入

越は　吳洋
加賀　管六
武陵
尾張　国秀
古意
久藏
蓼坡
丈永
紀乙　枕山
蓼古
作左　意吉

秋

秋の
秋の
秋の
秋の
秋の
秋の
秋の
秋の
秋の

白梅
仝
琴石
春亜
一学
道意
平角
岳翁
巡晴
雲座
阪和
尾代　梁意

秋 菊

子嵐のちゝはゝやあきの秋
甲賀宮のしのゝめのあきの秋
秋のそら秋のこゝろもしら菊の
秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし
秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし
秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし
秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし

秋 菊

秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし
秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし
秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし
秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし

秋 菊

秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし
秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし
秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし
秋のそやそこはかとへし笹の乳
秋のそやはに押あふ杉の乳
秋のそを人撰うてひりか
秋のそのふるさとうらふれし

この比ハ嵐も有ぬめ共たゝ
共ゝ〻〻春ふる老の波いろ
ひろの枝ふるくもあれや
拿ぐ嵐のつゝ〻共ゝ〻ふる
共ゝ〻〻や水の匂ひのまゝて
戸をもる月や共ゝ〻の面ん
春ゝの実ぐろりゝ共ゝ〻
そのおもも共ゝ〻ふるろり
共ゝ〻〻と秋のおとんふろう
雖ゝへるとゝ〻のおハもゝ
永ろろ為ゝ〻もあたや

伊勢 李石
黄吉
竜お
白堆
仝
保吉
共要
江戸 梅笑
月化
雄岡
如庵ゝ

秋ゝ
秋物
翁

歌ゝけや老しらけてあハもゝ
ろ詠ろとろろこれて〻ゝ老
古ゝへ〻ゝの従来や〻のもゝ
共ゝ〻〻ふん汁ゝて扇の人
清人ゝ〻ゝ折光りて秋のゝ
捺て折翁もゝ〻の〻
そろるの中ゝ〻ゝろ秋の〻
大ゝ要て秋もろ物ゝ
物ゝ〻ゝ〻ゝ秋ゝ〻ゝ
むろ庵ゝ〻ゝ〻ゝ
狗の月やろ〻ゝ

談林 双湖
江戸 一峰
下総 祝毋
陸奥 祖庸
梅便
伊勢 乙洞
汉ゝ
竜古
晩ゝ
白堆

明

ゟ一迷へ翁のあゐを道にたゞ
見てゐたゐ翁に扨るゐ小義や
ゐまゐれたれて知さる翁や
併ゐさるの事おや明翁
いち何れ同の見てろ〳〵翁や
ち〻みん〻ゐれゐ〳〵翁や
眼をさゐ義ゐ翁や義ゐの事
翁翁身ゐ事ゐ疲めへ
明立て秋天ひゞゐめや
人物に明明て気〻や
ゟ流に退れてゐし明の後

又明　陳奕　光明　ニア文園　排廣　愛ゐ　白槐　焼ゐ

会　士翁　道見　翁ゐ

明

家翁の明の孫ゐてゐし
明の業て自ゐ〳〵ゐ
明立て秋ハ有月男ゐ
ゐ義の超ゐり明の立〻ゐ
ゐ〳〵れて又立明もゐ〳〵
〻ゐ〻明の子れり義の手
明の義と翁ゐ〳〵ゐ
美扨〻明の立りゐ
ゐのつゐる気をゐれ明の
ゐ外や杖れて〳〵て明の立
明のゐ〳〵ゐ

碁石　斗入　大石　駆九　士翁　会　去城　持光　朱英　翁望　著立

遊　陽

寒月

湖の雪初て来たり
初て八そとぶ其冬之り
初て雁のおつ吹そろふ
初て晴の松そ見ゆく
初て玄鳥も気の頃
初てのうぐひすや竹の上
初ての月すむ鴫
初て見る朱の橋
初て聞や磬たをる山の上
松竹は昔にかはらぬ小田の雁
二股もとそへて一ツ

士朗
蓼太
雪芝
亜流
董水
義路
卓池
枝成
国定
蓼太

雁の数を知る老
その後に来る田の雁
初ての初て鳴たその初雁
初てやそろそろ行のこる雁
初てや其夜もむく降る雨
初てやそつよろひのそれ
初てやとぶハ時らしら
初てやうす雪ありの茅
初てやうす雪ありの茅
初ての声えるさる森先
まつすぐ初てのつつ、

乙二
護雨
柳居
十子代
る雁
白梅
成美
斗入
石葉
弗云
舎乙

月九
乙二
仝
道亮
仝
一葉
魯源
素藥
長鳥
竟松
平角

稼　もゝくさをかりをさめて秋の末
鶉　ふるさとのあれしかきねや秋の暮　江戸　左汪
鶺鴒　ひとむらにあれしかきねや秋の暮　京人　麻又
小雀　ゆふ雀なく〳〵やどのこ萩のつゆ　一葉
こ雀　こ雀や樋の先まで来てあそぶ　箕ふり　めい秀
こむぐら　こむぐらや秋もさびしき雀の宿　桐其
尼十花　尼十花なみだとのゝしめりかな　京店　子珍
　　秋をかぎりの来てや十花　談洲
　　雪ふるやうに十花　古渓

鶸　鶸来て秋の笑ふや十花
頬白　頬白や都の西もとをすぎて　桐舟
鵙　鵙赤し夕日や庇の蜻蛉　江戸　扶桑
鶫　鶫鳴のさびしや人の一たゝずまひ　相撲
　　さびしいの尾ふり深てりの赤し　遠志
　　さびしいの声〳〵もろこめせるめ　鬱晨
業　業哉　鬱れ来る十束いしまのうの原　竹巴
啄木　啄木や　啄木や　啄木や　啄木や　拍舟

駒

未つその月の初めつかた
駒ひそ凡そ走ぶ末のうわ
打のれの〳〵含る駒の周さわ
最後不卵の先に駒の脚
ふそそる色ハ初めつ駒に入ひメわ
駒のその駒に入ひメわ
駒一面来てかそ来かた
さ〳〵傍して駒に私さられる
ふそそる麦放さ
駒のそ〳〵後の麦毫を鄙れす
駒ちや天狗の状のその末

陸奥　庶雄　梓先
走院　麦院　岡史
着旗　下放　鳴雀　城奈
保吉　陸奥　孫子　白桃
院不　梅雪　岡史　書蕉
白桃　斗入　河着　在亜
栗北　乙二　道竟　仝
自化

駒よ驚
古刀逸

駒ちや法ふ振ふれへたて垣
駒のそ〳〵いつまて
駒ハ不ら改めそ
駒ふや抜木ふ
打ふのそ〳〵
古刀名や作のむ
古刀名の先ハそ
そ手ふりへ
不ふそす人ふや
加ふ駒の麦の
駒そのあんて

沙魚釣

白鮭

初鮭

鰯

鱸

三日月も風よりてゆるりしかけ　伊勢　又橋

秋深しりのおもてもまの泡　安芸　文鸞

沙魚釣や舟ちんでる石の上　高頭

沙魚つりの小舟漕ぎる木陰の舟　巻才

旅すかし流れに遊れたる鏡の魚　橘屋　古談

さしのぼる尾すれの鮭の泥流　白旗

初鮭やつゝみはらよう芸の越　乙二

初鮭や尊き機嫌のあつしおり　与人

あきらかにやはたまるよみて初の秋　淺淘

そこらうち下日の宿や鱸釣　柳所

有日の鱸切うて鱸かれ　巻才

渋鮎

落鮎

いつしかに萩や簾房もされ　寛松

小鰯や宿の川ふちの娘　冝麦

小鰯や祢をもたげて桃も兆あ　淺淘

渋鮎より恋しき秋の鮎　長翠

押合て錆びれしや鮎のかけ　九州　海

鮎さかり渋くてなかし水まり　江戸　山松

落鮎の箕や一二三の簗　白旗

落鮎や押流して流れけり　栄女

落鮎やとまても浮き流れいつ　淡路　素錦

落鮎に坂瀬涼したり峰の凱　近江　一鳥

落鮎の名をかへて日菊　木兆

崩　藥　心肌下をも脊ぐ筆丸上
之香ろ風も減ろ脊藥　上卷　陽石
れそろしな兎の屋屋や脊藥　二巴　麦多
蛇入穴　八年や亦凡人癒る蛇の穴　森　穀物
鹿　しろ千洲そ其の尾ハ牝時　抑元
おもすろそ焼の先手　搾気
しろみ手あ花ハ河の之熱ろ来ろ　多破
打ろ子拾打ろ金のまろ名　国更
ろ止てしろ人ろ若ろれ　合
打心やまろ人ろうしろみあ　黄右
めれろ名ろ脊の日の先れ　焼毛

しの手尾ふろ来たろ之
心ろの跡くハしのろるれ
周れたへて汤動ハしろる
ゆろの為にまろまれれ
毛ろるろ水ろ
打あくつそたけしの手
三交ろて周ろ
しの名不ハ一年と打の名
ろ名ろ子ろまくなしの手
毛ろるを
ろ名ろ
ろ名ろ

合
合
自雄
合
黄右
合
楚変
保吉
ル並
保吉

一字　岳碧
仝　乙二
仝　仝
仝　晩翁
養机　素卿
仝　雲峡
仝　尺文
月花　月仝
道元　家人
仝　核亭
養机　寛松
素槃　一葉

[illegible]
[illegible]
[illegible]

庵筆

あちこちむくそれやこれやの　閑窗　南溟
ありゆくみちをしるべにて　旅行　李仙
ここをさして来るこそ　驚破　元禎
別て来るこそやすからね
ふるさとをうかれ出ぬる世の捷うすれかり　陸奥　芋坡
あやうき来て清き流に近れつ蛍のみ　江内　雪丸
旅うれと云れいふりしの手
しら雪やとふべき男之　左弥
　　尾全

俳諧散句評義抜萃

九月

菊の香れ次ぐつの月　武荘　雪左
菊をもて又多彩しの月　陸奥　石丈
いもとこへあれの日のそこれ　美蕉
ふて来るてれの日のしりわ　乙州
七日の秋や小松も苔に埋く　道芝
七月やあるこまりし小田の路　万和
七月や三夜そこそ深庭　後始
七月やいれもくる菜のふ　秋峯
重陽　菊匂ひ和ふふ八重ぬる花酒飲ん　都庵

栗

栗の皮や栗のふ　　昨夕

歌を實に云ひ栗の名　　仝

答ふる栗の小栗や　　伊勢　久道

名の栗毬　　仝

栗のうや大阜

押よそ打と栗咲る月　　乙二

星光や栗のそりも栗のふ　　仝

るの尾も栗のうわ　　岳猿

日栗の名打九月のうわ　　寿の園

名ありて栗大ずくて作りる　　笠老

名も己かれて栗のふ

栗酒

栗の句　　尊頂

栗の句　　蕪句

栗の句　　学笠

栗の句　　康人

栗の句　　布雲

栗の句　　天民　越中

栗の句　　周泰

栗の句　　久翁　江戸

栗の句　　雲竹

栗の句　　春牛

栗の句　　史前

後雜

兼

兼合

兼

萩の咲れ白露もむる庭・か　保吉
咲こぼれて萩の葉しなれてるか　会
白萩や夫婦あるその名も奉　不明
京狩や人のこころも萩の花　会
萩折てこゝろも迫葉のふ　成言
風ふかぬ萩そしら葉のくゞ　会
庭萩の葉うすくて奥深し　花縣
白萩のちるもなごりの夕かな　琴石
月ふかし萩のうへなる夜の露　斗入
萩ちるやいとゞ月夜の雲加　春亜
雷加一聯の萩と上にあり　大江丸

萩咲て秋いと大くなりぬらん　琵琶
あの萩こゝもと白き花
あるじ一本咲て一本咲ぬ萩　旭丸
白萩の酸て庭も萩ぬ　会
白萩のちりもしらぬ夕の葉ぎり　祐昌
花こぼれ萩もあるじ八重萩　士朗
白萩の己枯ぬ手折めも花心　会
白萩のちりてありし葉かな　会
雪の旦萩の葉ぎりてありし　橋本
萩の葉や此ふる雪　雪芳

赤筆のあるさしやへの自
赤筆や筆ゝ筆ゝ筆ゝ筆ゝ
筆ゝ筆ゝ筆ゝ筆ゝ筆ゝ
り筆ゝの筆ゝの筆ゝの筆ゝ
筆ゝ筆ゝ筆ゝ筆ゝ筆ゝ
筆ゝ筆ゝ筆ゝ筆ゝ筆ゝ
たやうもおりん入り筆の中
凡筆ゝ人のゝや筆ゝ作
自筆とゝゝゝゝゝゝゝ
自筆ゝ折添ゝゝゝゝゝ

未聚
兄直
業笑
合
完来
砂死
鄭生
筈三
屠診
娼砂
大阜

ありとゝゝゝゝゝゝゝ
許判ゝゝゝゝゝゝゝ
判ゝゝゝゝゝゝゝゝ
筆の良ゝあゝゝゝゝゝ
筆筆ゝ注ゝゝゝゝゝ
ゝ代のゝゝゝゝゝゝ
酔ゝゝゝゝゝゝゝゝ
筆ゝゝゝゝゝゝゝゝ
庭ゝゝゝゝゝゝゝゝ
赤いゝゝゝゝゝゝゝ
自筆ゝゝゝゝゝゝゝ

二字
月化
道差
合
合
月死
陰波
乙二
合
合
定雅

寿閑
蓼花
素葉
蜆蓋
瓜坊
一駒
掛壁
雲堆
蓼岸
蓼白
二水人

白蓼花白雁
秋の田の苅
さくもいつ鋼
笑そめて外
まくれたる
白き花の葉
るれる男も
葉いろくも
蓼食て尾
いつくの葉
白蓼や木
の七夕迄

会
苅
寒
卓
会
饑
干
夏
養
魯
漫

心路来て筆の跡こそ狭けれ　桐扇
なよ竹の風に乱れて筆たかう　女志宇
ふでそそぐ雨の雫も千すじ筆花　仝
白筆は人をめでうる花のごと来　三斐
白筆九力一さし吸たがり　来亮
人の来る方ゆかしや筆花　机廉
秋のかぜさらさら手筆の跡　筑颪
花ばこれ白筆九ふく筆九ふり　仝
牛馬も匂ひ筆九上　芦九
夜前来る筆はうれしの奥　女志宇
心迄ばこれ白筆の風情かな　要作亮
　尼来自

かなめ石もやき地獄の筆の跡　文里
撰屑の深き心や筆の花　秋方
心あるめ筆うる人の踏る道　白考
松竹の寒き折もわすれ筆　九尼
乃ち庭の筆うれ花のあるじかな　文道
筆筒より筆氏名を記ふ筆　玉河
筆の主の白湯もくるまでの　柱九
人去てをうけ千や筆九花　硯車
坡の死めるひかりうけ筆毛　木老
白筆九隣ゆうべの筆や筆の　鷹汀
主のしまるひの筆や筆の　眠古

菊英酔　　斗牛

十月　菜冷ゝ月や花の白菊の花

初冬

初冬や　　越谷　林童

時雨やり松葉ちる　　伏木　雪汀

人の名や花ろふの　　高岡　保吉

初冬を　　秋水

来てしれハ　　麦宇

菜の花や　　斗牛

寂ハてをゝ　　鶴ゝ

ゆもるて　　号作

白菜の　　文喬

造作ろ　　芦洲

大菜や　　桂ゝ

ゆるの　　義女

ゆり　　卓堂

ゆく　　雪汀

いろ〳〵の　　麿路

立退て見てもかうしむる哉　洗濯　杜し
ある人のしてたゝるゝ月あれや　石河
人の家のへる庭を来ぬる哉　芙蓉
き近の心のこゝろやもゝこゝる哉　松中　逸勿
ある哉見て秋きりやもゝこゝる哉　玉光
栄ゑて秋きの雨ふりぬれや　嘉援之道
むらさめ哉　何あらしてふや白　柳起
あやまちて見ぬ人もなれ久しき哉　洛十
久しきをこゝろにしてみるあき哉　五葉
井てくみよひるの月ぞうつる哉　魚吉　なは
かゝる哉一雨

等ゝ哉　気もまれて動くも静等の白　かゝ　墓化
名をおもふ哉　朴よ芳月ぬ哉　午仁
なめくじてのこる等の哉　雲焼
久しきの見てのやん等の雑　茅丸
櫨ゝ哉　雲の秋哉　櫨のゝ哉　松中　風吹
朴ゝ哉　朴よ芳月ぬ哉の名くり　姫丸
櫨ゝ哉　晩時のくもとゝ手櫨ゝ哉　大嶋
自然木ゝ哉　ちりくるゝめてのゝ哉　嘉古流
落ゝ哉　ゝ哉ゝかれあにて落ゝ哉　ゑ能集
合歓ゝ哉　藁ちゝ汚ゝくゝや名取ゝ哉　淺狗
櫨ゝ哉　くゝめ見ハゝくゝのくゝ朴ゝ哉　朴廣

十三夜

平安あそんとれるころ
樽のもとにいつもや
気たかきあるじの
まうしし梅の月
かすその若こそう
時しものあるじの
うしの夢ることさ
許をとそ松たいも
更つまん梅のそ
ふる雪そのうり
虎去へきし吹払へ

李尺
竺二句
野る
銭坡
徐な
東路
室廣
路辻
名月
更風
夢也
代店
自明

題叢秋

百卅九

梅いろん田にて
名をえへもの人
月まえも花いえ
うもえ月の
のうえいまう
手れまた雪いう
雪のせてまのか
うち月つ杉の
此名のおてう
等のは子教
豆名月豆いて
名のまうえ

士訪
栄英
永寒
一子
素藥
全
里雙
観之
部賀
古幹
魯原

栗　　自雅
推　　保吉

栗

高栗や栗の毬の笑ひ口
毬栗の笑ひ口より栗の顔　尺
いが栗をさす人ありて四季哉　法
栗ひろふ拾ひて喰ふのみか　扇翠
刈あとの栗もあるべし山の入　共雀
高栗や日の入山の口　文路
山里や拾ふも通ず栗ひろひ　蕪
高栗をどんぐりといふ不学哉　調疎
牛のよう栗くふ秋の夫婦にて　調疎
いそ〳〵や栗拾ふ秋の下部　自雅

柳

志の此こゝろこゝろこそ侘ぶ来れ
柳のこの高初てよりあの白　朱英
雨後の青々たるそよ〳〵　半日閑
多〳〵さや柳枝そ　天芙
柳のさやるのいろもあ　大和　素楽
その黄て何め〳〵柳れ未まお　七ヶ　鞠九
山里や鮮売うる柳赤　蔓古
吟に来る山姫さう一枝の毛　保吉
柳の毛を山松もそこれる　樗里
柳売のいよう毛するは花か　林毛
人の集て洗うは売すあの柳　菅三
　　雪笠

熟柳

況柳

柳の木に附ふり方の見
ゞてり此まと迄入や夜の柳　卓池
柳ふつくと人抜〳〵為か　栃万
う吹〳〵そ柳ふ〳〵気か　蕉沢我
集柳土売ふり人の新　國九
柳の甘こ〳〵ん況柳や　〃之
況柳や菊押めそ見る　蘿道
況柳てふも多り為か　主文
況柳や帰もへこ〳〵　百雄
於田姫のんそうー柳の況　二柳
　　菜兆
　　素堂

柹		深柹やそこ見やる秋の雲
		深柹にことを拾ふる人や
蜜柹		り地のそやな蜜柹の木下や
の連毋		そ久方の雲ぢの雪ぢ越や
冬柹		金柹の一をそなめ神もれ
		ずえだ十二ふ小剌の飛てう
柹		柹と鹿の斤阿に柹のを晴
		柹の白れ月あをてる雪もや
		白のうえあるくのや柹の笑さ
柹味噌		雨あしやまの笑柹こそ楊より
		雲ハろふこうこうの柹こそ冬

	方永	柹こそ哀のさそ乳
	星雪	深柹にことを拾ふる人や
	久嘱	蜜柹の木下や
	芹子	冬柹の一をそなめ神もれ
	三條人	ずえだ十二ふ小剌の飛てう
	紀方	柹と鹿の斤阿に柹のを晴
	文雄	柹の白れ月あをてる雪もや
	摂津	白のうえあるくのや柹の笑さ
	柳郊	雨あしやまの笑柹こそ楊より
	筆右	雲ハろふこうこうの柹こそ冬
	護柹	

柹		柹こそ哀のさそ乳
柏	樹	深柹にことを拾ふる人や
擬擔実		そ久方の雲ぢの雪ぢ越や
梨	よ	まそ十二ふ小剌の飛てう
		石ぬた事ぬそ哀のを晴
		よう月ハろうむくうそあのつ
柹		柹の実やいそろふて来さて
		そ久方や柹の完のよれ更
枝	実	干ばそた枝実何白を実そう
		写真しそ座むくや枝の実
枝	実	座のハ花より柹しー枝の実

河内	一前	
京	宜甫	
伊豫	吳天	
	大江丸	
陸奥	獨碌	
	春機	
	一茶	
	路考	
下総	支考	
	夢汀	
尾州	笠芳	

著花そ　ぼいしや人ぐるま　井肩
茱萸　茱萸の赤き実ども　晩秋
　　秋山や茱萸の赤実珍らかに　自雄
　　山々に茱萸の実赤く秋深し　士朗
　　茱萸ともまだ色づかぬ小鳥哉　乙二
南天実　南天の実や雪ちらし　陳更　十升
　　南天の実や雪ちらし　久臧
山椒　秋深し一顆の山椒の実垂れて　丁鹿
木実　木実拾ひて木の実嵐の寂しさ　文古
　　木の実降るもろこめ木実や　幽晴
　　木の実降るもろこめ木実や　自雄

楸　楸折そへんこなたへ楸　夢丈
　　楸折りそへある人に花を　自雄
　　それる実ハいろもあれ楸　春亜
　　オそうの如くに楸　雪芳
　　よそたりくハもの楸　陳更　風鹿
　　同じくハもの楸を楸　魯仲
常山実　常山の実うれ初めの　伊芳　是風
　　常山の実や　圭治
牡丹杭　牡丹杭ふるき杭に　来牧
煮そ　しのぶそしのぶ忘そよりも　寅々

鵜篝　鵜篝の光りてつよむ句れハ　蓮寸

鵜飼や岩のかけ目の日に映す　晩霞

あさ手に鵜飼うるを流来る　乙二

かんなりの香すも咲くころかな　梅孤

思草　おもひ草を葉手の光可し　李秋

万年青　あらけて朱きもり出す花嫁ハ　白菜

吾亦紅　木の間や白の隣あけれ日和　杜穀

秋もまれもとおもんてると也　白雄

まれもうたの名の高い人に見られけり　凌文

吹風ハ霧に見れて地楡　尺昂

芦花　芦の穂むりかしつつ日の道　讃洲

人影ちれり光まし芦のふ　三及

芦荻　すうすや芦の白穂にちる花　白雄

芦の穂に星ちられする　道差

菜生萌　菜生まや手にもうれ雨のふり　白雄

豆引　見つけて日あれハあれ豆畑　表丁

鵲豆　なま豆れまや根抜出す光れ　枕山

松露　松原の露れまた探れ松露す　早乙

茸狩ハ仰くる見れ松茸ハあるる見れ我　菊しず

松かけや庭に松る松茸より　保吉

松の名に松茸の新八面し　士鶴

松茸　松たけまさるまたに人し城の人　素琉

羊肚菜	北そこまよる世ういろ蕈
初蕈	初蕈やさ仕さい獨ふれやくく
雷ふり	蕈ふり人ふめ紙の雷ふり
ふ蕈蕈	大蕈ふふれも何をねふり
板蕈	乃そふれた末のふへて板蕈
毒蕈	人をふる蕈ふしてふしよ
蘭狗	蘭狗やあるろれいてものや
	たケ狗やそのふ詩しふ人の良

九蕈	白雄
白雄	又明
貞佐	道彦
雪笠	月天
屠龍	狗尿
丈方	伊勢 花賊
一葉	李下 堯
久賊	蕪白
一葉	去狗
女子代	堯坡
蕪ケ二	越中 乳雄
挑	

尾越野　白雄
初野　又明
花朱烙　道彦

烙ふふふ机首ふくぶのこと
ふふふ尺ふ乳月の木のことや
時ふ木蘭のふふの窟たふり
たケふや人のふふ氏造ふく
たケふや烙ふふやふれす

尾越の野の板月ふ　伊勢　花賊
初野や四ふふふれて汽の上　李下　堯
烙ふふも踊れふく雨　蕪白
烙にふる良もふ手　去狗
ふ屋に烙ふふいてふ糸鈴　越中　堯坡
胴代ふ胴代ふ造やふ乳雨　乳雄

秋

雪踏麻　花麻や雲と芝ともなりくと雪踏麻の骨うし

空　愁　梔林をのくりありく空也

露　雪　雪の雪に独一本の笹　杭

雪の雪や小夏の甘蕪売（サトウ）

雪雪や古に杭迫む茶も売

雪雪や老い寿の翁ごと名

雪の雪秋い雪さへしくと

火とりのわもろて雪何白

芙蓉　南嶽　五石　都老　橋屯　長雪　漢物　雪笠　白考　白雄　公

秋

雪　愛我い気何白や

雪匠ゝそうて雪何白

雪のめれてまりうう雪気

芙中のいい作ろ十七雪気

あてあの梶棒ま松て雪気

棒しまの芝ゝそる雪気

百姓のうへをそ秋の雪

汚穢をとろゝうれ雨の雪

梶雪や茨のやうれもう

秋の白松子の院れろ更ね

雁秋　漫ゝ　詩河　遣宇　辞ゝ　佐ら　朱矢　月化　岳稲　竟於　號雪

秋附

耳にせぐ笹の音や雄の音
檢校の塚井を穿る秋の音
旅ごろも白波秋の山四ツ
四時の末深き秋の白
桐の木のそよろや秋の白
京地のすゝ氣めるや秋の音
秋の白孫打つてゐる
雄の白てがれむる敷文机
花鏡の義太ふりや秋の音
分をうむ等の秋や雄の音
遠田州又等人に附白ふり

道元
公
士朗
鏡冢
柑翠
女淡葉
葉塢
葉山
高流芝
流水
九玉
李石

白雄
大江丸
文明
春亜
蕪左
士朗
姫路
公
湖江
鬼葉
尺艾

秋の雪

ふる雪も秋もけるとゆふべかな　又兵衛
降こめて雪も秋の夕暮や更ん上　春亜
秋の行る月も先知ん雪の空　竜右
雪もたゞさいあの心寺秋の雨　仝
あるゝ宿も雪も秋の夕暮　兼秀
晴ん方も秋の雪ふる秋の夕　左
詰りて人も尽ぬる秋の夕　白桃
寺のつゞいるも通ら雪の夕　仝
雪のふのんにしむや秋の夕　都光
跫を雪ふる秋の夕　保吉

秋の入ふもまだや　惣吉
奈よりそ秋の夕　斗入
わといそふ人のいそん秋の夕　白圃
人ふられ秋名ばかりの夕　跡乃
ふの雨や町生市の秋の夕　桂九
河ひや月ふまさいても秋の夕　仝
秋のタ打ろれいふ雨ふ　松先
あれ乃ふ宿のタ　士朗
よの月ふ出ふまでそ秋の夕　仝
りの雪ふいふれも秋のタ　仝
たゝふ一あとふつゝ秋のタ　長翠

この比のまめまめしも旅のあはれ
旅衣着つるうれしも旅のまめ
旅衣着なれてうとし旅のまめ
旅のまめ素先のしおり旅のまめ
秋のまめ一ト世ず有もの旅のまめ
郷の味を二度も知て旅のまめ
前松ハ松たいつろる旅のまめ
旅のまめ人のうしろや秋のまめ
旅の道ハ松と乳旅のまめ
恋るやあれもいつるの秋のまめ
旅のまめ笑ひとこハ笑ひり

撰者
仝
業飛
文方
春盛
宋吳
仝
夏童
子共
一子
頓吟

題叢秋

寒れこりや旅て矢しな秋のまめ
ひとすぢとこそ文ふ旅のまめ
旅すれハ旅うとうそ秋のまめ
旅ふりを見て人ハ旅なく旅のまめ
乳れてる旅をしらぬ人の秋のまめ
旅のまめ笑ハれまの見て初る
一茎の笠筵やとれ旅のまめ
うき凡や名の同名の秋のまめ
旅のまめ春りうるめ人ハうし
秋のまめをと松をあるしか
旅のまめうるめれ庚をそくまう

岳猪
春花
仝
夫梁
養机
道意
篤く
華生
夫卿
接生
竟松

松ちゝを人の送りめ故のゝ
うつくと人れ出れて秋のゝ
り故やちゝうつも故のゝ
故のゝ心乃て立ハ人もちち
佛ゝや石板高故のゝ
を山や孫のあゝ秋のゝ
越て寿さ山ゝし故のゝ
わゝの元うも松秋のゝ
立あゝちのちゝや故のゝ
ぬりいゝやゝ乃や秋のゝ
有ゝゝハ向ゝれ故のゝ

少泊　双鳥
一美　朱硯
学笠　玉阿
雲梯　芝陀
意白　故光
夢ゝ　秀幼
方明　李泰
庵人　杜丸
卓池　吉白
吳老　桜ぼかし
桐月　芸清
　　菜来

花見秋

見れ春あゝゝるの人ゝ故のゝ
柔の桐も乃てや秋のゝ
七明の屋のすゝやの秋のゝ
有りゝゝやゝの出て故のゝ
ゝゝ多の故や人に人のゝ
主居を仕舞ゝや故のゝ
立むゝ松ゝのいゝ手秋のゝ
秋のゝゝ絶ゝ月の上ゝ絶ゝ明
あゝ人れゝとハゝや秋のゝ
故のゝゝのゝやゝれゝれゝ
むつゝい清にれても故のゝ

きつゝきハ月あての出湯て姥の声　左竹

秋声

あつさにも月に別るゝ姥の声　盛圭
山里や杭あり流るゝ秋の声　半入
今朝ありて膳飽ハ見てハ姥の声　梳左
月の出てもたゞ力なし秋の声　擇兆
茅の家を去れハ不定し姥の声　栁英
天気鮮鵜をとゝろや秋の声　慈白
古か行て気田出る姥の声　長翁
月見ても今見ても花ハ秋の声　淡路 花桂
されハとて子まるも鳴す姥の声　可静

秋雲

荒海や波をこかれて秋の雲　晩気
くもるとも又てさえとり姥の雲　擇兒
百も形ちかしよりて秋の雲　蒼乱
見ればそゝや毎日秋の雲かけ　木海
飛るをとゝそり之姥の雲　蒼可
姥の雲あれとる降とハ来たる　兄十
山飛ハ着てり之姥の雲　重刑
静かなる山もあし手秋の雲　摂津 周泉

秋山

人もむと人のいふ之姥の山　盛圭
大なりとり着て見ゆる姥の山　仝
姥の山許て書るゝするや　文河
是てもうれめきまのや姥の山　英二

月を待てつゝ
村て久しく秋
沖つ方ありに
先住てる
尺て五月
周吉の
洞よてゐる
氣そのつゝ
秋のむ
裁山の
翌ろうへ

垣内
土朗
長翠
擇史
乙二
月化
道彦
寛松
春人
田人

滝はくに
人手のて
秋のむ
きのこ
今降て
日の
水
秋の
秋海

一華
玉兎
笠甫
井越
京月
陸奥安藏
菴主
旨之
大皐
木老
晩翠

秋浦しらくものそら百や浮の秋　又仙
相川ゟ阿く枕火れ仙一舟の　百池
秋ゟ舟の外ゟ魚のうろこの　作女一子
雲ゟ舟のゟ竹のそこそこゟ　晩雲
氣氣のよく物うり舟のゟ　盛重
秋のゟ去年のうら氣爲うく　春亜
舟のうりのうちの月をた流れへ　使力
雪野の毛元除ゟ舟のゟ　士朗
ゆく年のそうみてこゟ元秋のゟ　松元
ふる年のうるう花ゟ舟のゟ　摂生
秋のゟ海氏中ゆく日　和加

題筆秋

初人て旦浪れみる舟のゟ
月をを高ゟ雪ゟ秋のゟ
秋の月のうるの横板雨ゟ
須賀ありさて雨ゟ舟田ゟ
そをちうしゟ物ゟ田ゟ
遥ゟさもをてうりを追ゟ
り舟や松元のゟ氣
あるこゟや小春ゟ秋そり
り舟やうゟ板変れ
時のゟりまよりもり舟そ
り舟やよゟ元ゟ越人

月化
雲松
元直
追元
重松
女麻ゟ
ゟ雨
晩雲
白雄
仝
夢ゟ

待秋

秋名殿

おもひやる其の方の空も秋の
雲のめでたくあるべきを先
ず心にうかべてみて又たつ
ことしく物の明らかなる秋
の末は如何ばかりうつくし
からむ小鍋立の賞てふ物も
如何の名殿入りの末は小自
在の煮えやうも如何ばかり
尾花うつくしかるべき虫の
心ぐるしく鳥羽なくころの身

秋名殿

待秋

素迪
雞啄
楓生
史于
北尼
女英元
左節
然圭
去病
翁堂
圭牛

秋雨

秋雨の降りてやみぬ水の音

星ぞすゞしく雲ぞ行きかふ

秋もまた朝夕のみぞ知られける

石とは見すて雲ぞ重なる

ちぐさなる心ぞ秋の夜やとなき

月毎夜の秋やとなき

よる波をうつ秋の声小

夢そのゝ生てゐる秋の人

秋籬花物思ふ袖小

冬 道美 呪苞

寒松 世井

寒松 寒お

冬 冬

閑更 月雄

冬

秋の秋をうた秋の

雁を待月

秋のふもとうたうり

松にそよ松れるよりぬ

そのいへうれつる秋の人

哀れしそれ老たよるる五十

昔の降んの夜れたる

因の孫や追悼ます

誓ての歌をよそ村落を

舞に見くそ誇の風

席れをの秋よて折たまう

寒晴

土鈴

書擬

擬先

道美

寒雄

擬先

培源

大和　憑自
武蔵　双鳥
山城　土明
女　きく
　　秋山
　　文角
　　一阿
　　古文
　　芝光
　　松麿

〇百五九庵